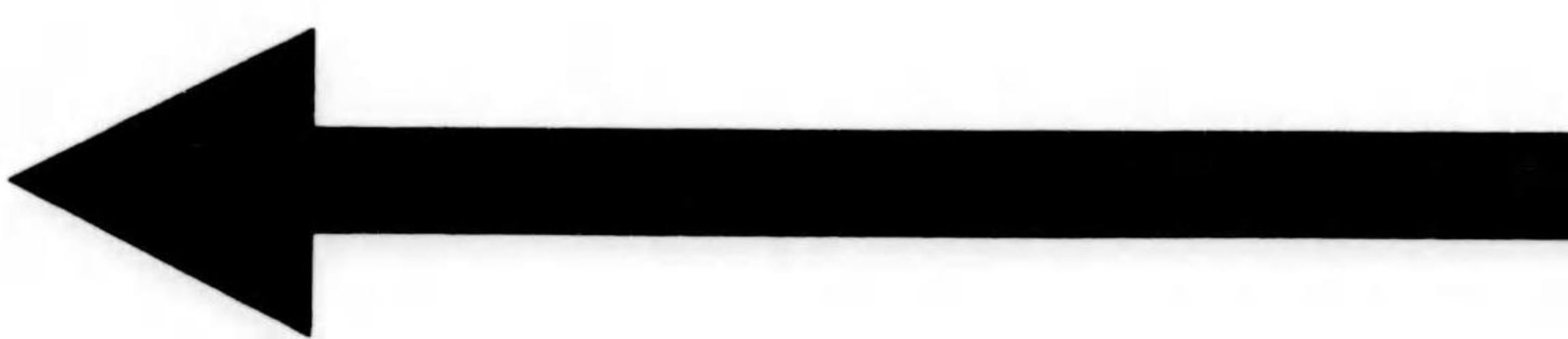


始







花鳥叢書目次

天傑 幽霊問答
 滑稽 お臍の宿替
 笑話 お臍の宿替
 武者 四十八番御前大試合
 名家 四十八番御前大試合
 怪奇 不思議の洞穴
 小説 不思議の洞穴
 天傑 嵐山三十六番斬
 豪傑 嵐山三十六番斬

花鳥叢書目次
 護まで至極面白

春



花鳥叢書目次

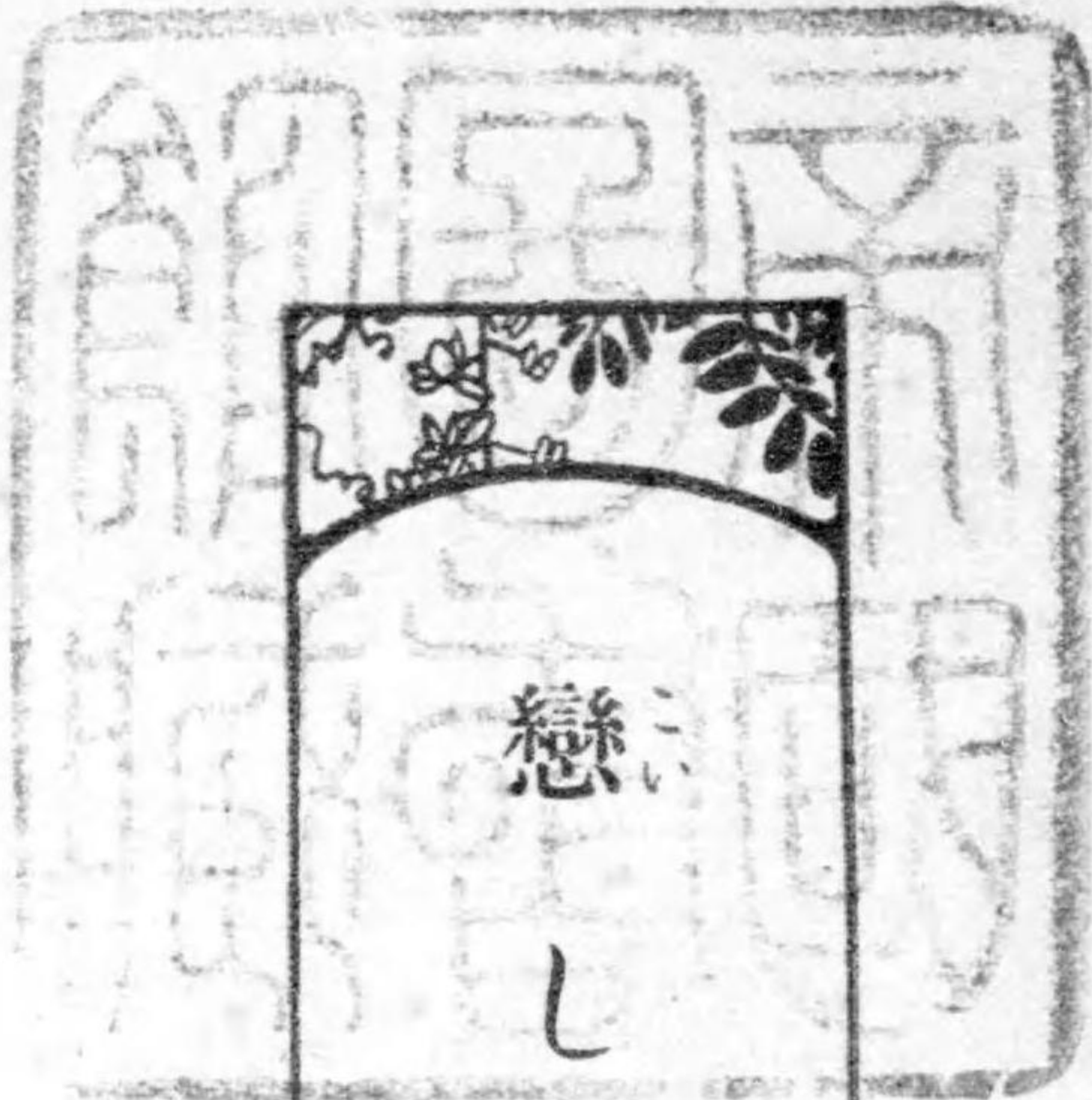
探偵 血染の手巾
 小庭 戀しき仇
 家説 戀しき仇
 探偵 幽霊船
 奇聞 幽霊船
 落語 金馬集
 大阪化物屋敷由來記

花鳥叢書目次
 護まで至極面白



持100

52

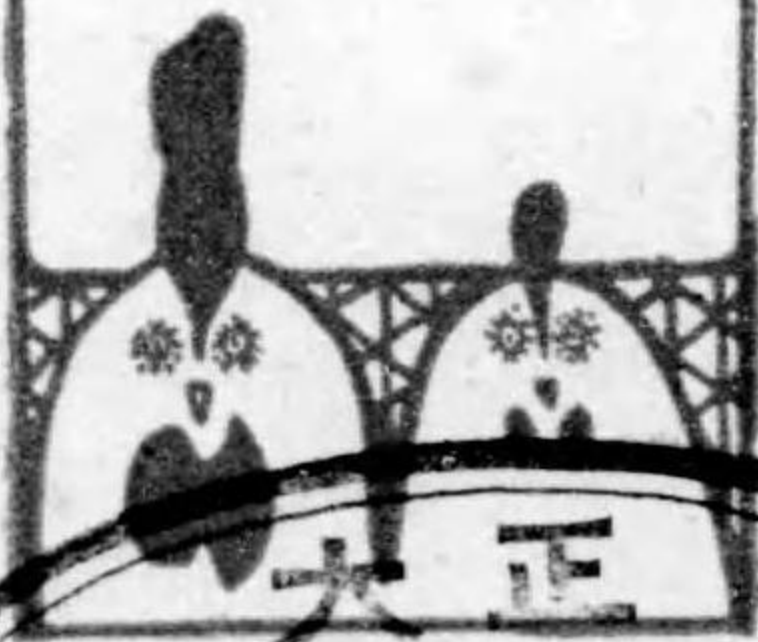


戀

し

き

仇 あだ



大正

3. 5. 28

内交



天正 山三十六番

天正 山三十六番
 小松 不思議の洞窟
 津波 大番頭大知合
 美談 神の宮
 三浦 綱目

新編 天正山三十六番



同	和田天華君作	同	同	渡邊黙禪君作	同	同	江見水蔭君作
同	君作	同	同	君作	同	同	君作
戀	二人の	美人の	怪人の	千枝子	女馬賊	探偵の	三怪人
の	意	魔	怪	子	賊	娘	人
意	氣	女	子	子	賊	娘	人
地	女	魔	怪	子	賊	娘	人

上記の小説は
東西各地の新
聞紙上で大好
評を博したも
のですからご
れを讀んでも
至極面白い

戀しき仇

發端の一

小川霞堤
黒法師

「彼處にも螢が居てよ」。暗い小徑の中に水色の浴衣着の女が、左手で心持袴を絡めて、右手に團扇を持ちながら、露深い草村へ白い脛を踏み入れる。「危いよ初江さん」。同じ小徑の上で中形の浴衣を着た男がステッキの先でコツ／＼と土面を叩いてゐる。「轉落はしなくつてよ」。「螢なんぞ捕つて何うするんだ 子供だねえ」。「だつて阿母さんにお目にかけるんだもの」云ひながら團扇の柄を口に啣へ、白い二の腕を差延べて、露草を分けて螢を捕る

と。「捕れてよ」宛も嬉しうに云つて、元の小徑へ這ひ上る。「どれ」と男も側へ寄つて、女の手から螢を撮み上げ「通がしてお遣りよ」「厭よ」と、女は男の袖に纏り附く、男は快さうに笑つて、螢を返し「初江さんと改まる」「ね」女は螢を袂に入れて、左で確乎と握り、上目使ひに男の顔を見上げた。「初江さん先刻云つたことは屹度だね」「屹度よ、私は貴下り妻なの、貴下は私の良人なのよ、若しね、私が死んだら貴下奥さん持つてほしいわ、貴下がお死になすつたら、私一生獨身よ、でも、私が死んだら花だけは手向けて頂戴、花はね、ね、……」と少し考へて。「野菊が好き、お線香もですよ」「は、は、は」と男は笑つて、廷喜でもないこと云ふもんぢやないよ」「だつて、私、未の未まで思ふ性だから」「僕が居なくなつても初江さんの氣は變りはずまいね」「大丈夫よ、貴下は男だから變るかも知れないわ」「決して、……命でも賭る、だからね」云ひ、男は初江の顔

を顧る。女は一向平氣で「何時出立て？」「明後日の十時の汽車で」「私も東京へ行きたいわ」「僕が學校を卒業したら、二人で日光へ新婚旅行をしよう」「高等商業學校ツてのは、大學校より好いの？」「さうだね、道が遠ふから何方とも云へんね」「大學校でなげや學士とは云へないわね」「云へるとも、矢張學士だ、商業學士」「學士になれるの、私は學士の奥様ね、阿母さん、何んなに喜ぶでせう、それまで阿母さん死にはしすまいかね、男の顔を見上げて、悄然と洗み込む。「大丈夫だよ、まだお若いんだもの」「阿母さんが死んだら、私、それこそ一人法師よ、貴下が見捨てたら私死ぬわ」「見捨てないからね、初江さんも變心しないといふ證據を見せて呉れ給へ」「變心ツテ、なに？」「困るなわ、心變りのことさ」「さう」と、極り悪さうな態をして「證據ツて何うすれば好いの？」男は聲を擡はせて、何うするつて要りが、その……」「厭よ」と、初江は邪慳に云つてす

つすと元来た道へ引ッ返す。「初江さん……」
 男は、初江の跡を追はうとせす、氣抜きのしたやうに、徐々と歩を運ぶ

發端の二

初江は後ろも見ずに、暗い小徑をすつと歩いて、軒燈のちら／＼する町中へ戻りかけた時彼方から息急切つて、駈け来る女があつた。「梅ぢやなくつて？」初江に呼びかけられて、女は四邊を鳥鷺々々としたが、其れを見て「お嬢さま」と、息をつぐ。「何處へ行くの？」
 「わ、わたし、貴女を探して居ますのよ、まわ好かつた」と、胸を撫で下して、「何處へ行つて被居いましたの」「罨捕りに行つてたの、これ」と、袂の盤を見せる。「この暗いのお一人で……、内田さんと御一處でございませう」「い、ね、私一人切」云ふ顔は少し熱れて居た。「お歸り遊ばせ、大急ぎで、歸りませうさ」

「阿母さんが何うかお爲ぢやないのかい」初江は蒼くなつて、不安の眼をお梅に向ける。「好くございませんで、阿母さまが、貴女を呼んで来いと被仰いますの」「私を……、阿母さんが……」初江は茫乎した多で、只、お梅の汗ばんだ顔を見つめる。「さ、早く歸りませう」お梅は初江の軀を支へるやうにして、急ぎ立てたが、弗と、人の足音に振り返つて「おや、内田さん、御一緒だつたのですね」と云つて、お梅は迂散臭さうな眼色をした。「何うした、お梅さん」側へ寄つて来たのは、前刻の男である。「内田さんも歸つて下さいまし、お師匠さまの御容體が、少し變つたやうですから」「そりや可かん、初江さん、何を愚圖々々してゐるんです」急ぎ立てられて、初江は浴衣の袂を顔に當てたが、走るやうに歩を急がせる、雪駄がちやら／＼夜の町に鳴り渡つた。舟板塀の内側から、柳の縁が枝を垂れて、角な軒燈のやな井といふ字を隠見させる、門の前には車が一輛横づけにされて、車夫が

蹴込に腰をかけ乍ら糞を吸つて居る。初江は、艶つばい新蝶々を、ランプの光に瞥と見せて、薄暗い入口の格子戸を入つた、庭にはでろ／＼と下駄が脱ぎ捨て、ある、奥では深沈な咄聲が聞ゆる、胸が先づ騒いで、仄邊の空氣が何となく滅入りさうに感じられる。初江は悸々／＼しながら、母の病室の前に立つて、襖の把手に手をかけると「初江さん」と小聲で呼んで、私と袖を曳いたものがある。「あら、林の叔父さん」林は四十格好の、ずんぐりした男である、手真似で聲が高いと制して、「此方へお來で、今、眠つて居られる處だから、今、貴女が入つては好けん」「叔父さん、阿母さんにもしものことがあつたら、私何うしませう……」と、林を見上げた眼から、はら／＼と涙が零れる。「心配することはない、私が居れば、内田の叔父さんもある、皆、他人ではあるが、貴女を放つて置くやうなことはせんから、氣を鎮めて安心してお在でなさい、それに阿母さんも息を引かれたといふで

はないからな」「は」「さ、泣聲が阿母さんの耳へ入つては好くない、内田の叔父さんも來て居られる此方へ來なさい」「は」と、云つて悄悄と立ち上つた時、襖の間から、力ない病人の聲で「初江、初江、初江は居ませんか」其聲を聞くと、初江はまた胸が迫つて來て、「は」と云つた聲が涙に徴れるやうであつた。

發の端三

六疊の片邊に床を展べて、其處に初江の母の仲子が横つて居る、五分心ランプの光が、簾越に吹き込む風にぼ／＼と暖く、風鈴は態ど取り脱けられたが、火の入れてない岐阜提灯は、始終ゆら／＼と揺れて居る。仲子は、醫者の勧めた興奮劑で、口の乾を濡して、括り枕に片腕を凭せ、白い毛布を腰の邊までかけて、淺黄メリンスの腰帶を、緩く前で結び病み瘦れた軀

に氣を張らせて、昵と初江を見た窪い眼には、新らしく露が光つて見える。瘦れた手で、鬚の後手を掻き上げ、誰も居ませんか」「はわ、誰方も……」初江は仲子の枕邊に、丁と座つて、兩手を疊につき、蒼醒めた唇の面を見るに堪へぬ態で、沈と俯向いて居る。「初江さん、あなたは私が死んで了つたら、嘸心細くお思ひでせうが、決して力を落して、病氣などして呉れてはなりませんよ、阿母さまはねね、假令死んでもあなたの側を離れはしませんよ、あなたが立派な夫人になつて呉れるまでは、阿母さまは死ぬにも死ぬないのです」「阿母さん、何卒そんな悲しいことは被仰らないで下さいませ」と、袖口で眼を押へる。「あなたも不幸な身に生れて來ましたね……」仲子は一ト頻咽せかへる、初江は後しろへ廻つて、靜に背中を撫でながら、「阿母さん、假令私一人法師に取り殘されても、私は立派に學士の奥さまになりますわ、だから、安心して快くなつて下さいませ」仲子は胸を摩つて

娘の顔を振り向き澤のない面に淋しいながら笑を含んで、「學士の奥さまになつて呉れますか……」「はわ」云つて覺悟す顔を赦める。「あなたは十五になりましたね、私はあなたを教育することの出來なかつたを何よりも悲しく思ひます、今の世は、昔と違つて、教育のないものは世の中に立つて行くことが出來ません併し、私はあなたに、一ツ嬉しいことを云ひ遣して置くことがありますよ、それはあなたのお父さまのことです」「阿母さん、お父さまはお亡くなりなすつたのぢやございませんか」「それがまだ分りませんの、詳しく咄ますから、前へお出でなさい、もう脊中はぶろしい、わ、樂になりました」初江は、また元の座に直る。「今までは何にも云ひませんでした、もう、お咄する機もあつたまいかと思ひますから、今、何も彼も打ち明けて聞かせませう、私の父、あなたのお祖父さまは舊名古屋の藩士で、藩では巾の利いた一人であつたのですが、御維新の際に、忠義が反て不忠と

なつて、家祿は取り上げられ、一家は散々になつて了ひまして、私は母の手で丁度七歳まで育てられました。それから義理ある伯母の手に育てられ十八の時、江戸一條家へ御殿女中になつて、二十二まで辛抱しました。私が二十歳の時、あなたが生まれたのです。あなたの父は一條家の御嫡男で、名を正治さまと云ひますよ。後添の阿母さまが邪怪な繼々しい方でおありなされるため、陸軍の軍人でありながら、無断で家をお出なすつた切、何の音沙汰もなく、私は正治さまの乳母の宅へ引き取られて、そこであなたが、二歳になるまで厄介になつて居ました。その間に乳母やは、大阪へ行かなければならぬことが出来て、私達に別れました切、少しも便りを聞きません。けれど、唯に大阪は天王寺近邊と聞きました、苗字は野村、名はたまと云ひますよ。

發端の四

初江は耳を焔て、仲子は後を語りつゞける。「機があつたら、一度、乳母を訪ねて、お父さまの在所をお聞きなさい、乳母は定めて知つて居やうかと思ひます、私はあなたのお父さまにお別れ申してから、全十五年、昔習つた茶生花の師匠をして今日まであなたを育て、來ましたが、女の操は只の一度も汚したことはありません。これが何より阿母さまの置土産です、あなたも女の道だけは守つて下さらなければなりません。女は操が何よりの大事です。いくら學問才智があつても、貞操のない女は、魂のない人間と同じです。男に心を許してはなりませんよ、そうくまだ最一つ、あなたに遺して置くものがありません。云ひながら、仲子は、敷布の下から、金襴の帛紗包を取り出して、「これは、私の母、あなたのお祖母さまに別れます時、形見として

戴いたものです。これは膚身脱さず持つて居て下さい、そして身の詰つた時、もう、遣る瀬ないといふ場合に、この包を阿母さまだと思つて開けて下さい、それから」と、左手の薬指に籍めた、純金の指環を抜き取つて、瘦せ枯れた掌に載せて出し、これが、あなたのお父さま、正治さまから私に下さつた贈物です、お父さまにお目にかゝる時がありましたら、これを證據に名乗合つて下さい」と、詞を切つて、「此指環の内側に、何と彫り込んでありますか」。初江は、母の手からこれを受けて、昵と内側を見詰て居たが、只、顔を救めるばかりで、何時までも黙つて居る。「これが讀めませんか、……あなたのお父さまと、阿母さまの名が讀めませんか」「阿母さまの名は讀めますわ」「何とあります」「なかに」「其下の字が、お父さまの名でまさはると讀むのです、……私は只、あなたが可愛さの餘りに、あなたの厭に思ふ學問を無理にでもさせなかつたのが何よりも心残りに思ひます。

しかし心がけ一つで、今からでも遅くはありますまい、わ、これで私の重荷が下りました」云ひ終ると、仲子は宛も落膽したやうに、臑を延べ枕に頭を凭せて、一旦すやすやと眠るやうな振でわつたが、やがて鈍く眼を開けて、「初江、初江」と呼ぶ聲は、此世の人の聲とも覺ぬ程で初江は我れ知らず母の手を把つて「阿母さん、阿母さま」「は、林さんを……」「た、誰か来て下さい、阿母さんが」と初江は早口に高く呼び、四邊を見廻はしたが、おろくした聲で、仲子の耳許に口を寄せ切に母を呼ぶのである。其聲に次の間から居合せた、林、内田父子、醫師、下女お梅まで馳せつけて、仲子の前後を取り巻いた、仲子はまた、「は、はやし、さん」と呼ぶ。林は仲子の耳に口を寄せて、「仲子さん、初江さんの身の上は、倍と私が引き受けました」仲子は微に首肯いて、やがて引く息ばかりになる。末期の水を筆に啣めて、母の口を濡した後で初江は、宛ら現の様な心で眼は腫れ上つたば

かり、あまりのことに涙も乾いた。

(一)

広島、二葉公園の櫻の木陰に立ちながら咄して居る二人の男がある。一人は陸軍中尉の軍服を着け、一人は大島の羽織に鼠の中折帽を冠つて居る何れも同年輩の二十五六。中尉は、休めの姿勢で、佩剣を右手で杖づき、「併し奇遇だね、斯うして広島で再會しやうとは意外だ。尤も君の郷里が此地だとは聞いて居たのだが」中折は象牙のパイプを口に當て、「君は、何時頃から此方へ轉任されたのかね」「俺か、俺は去年の十月にやつて来た、そして、君は何時出たね、學校を」「今年さ、而かも、出たてのはやくさハハハ」「さうか、それは何より芽出度い、すると、もう立派な商業學士だねハハ」と中尉は、さも愉快さうに笑つて、牡丹の如く咲いた八重櫻を見上

げ。「わ、好く咲いたね」と少時恍れたが、「時に、まだ何處へも奉職しないのか」「うむ、略、決つては居るんだが、まだ確と決て居ない、或は君の郷里へ行くかも知れん」「大阪へか、そいつは旨い、俺と代つて貰ひたいもんだなアハハハ」「とところが、横濱に少し義理の絡んだことがあつて其方も斷り難い仕儀になつてゐるのだから、申譯の爲めに一兩年は濱に住むかも知れないよ」と、云ひながら目の前を片々と散りかゝる櫻花の葩を華奢な左の手で受けて鳥渡、鼻先で嗅ぐ。「ぢやア、引ッ張麻といふ譯か何處でも、君は色男に出來てるんだよ、アハハハ」「中尉は語調を變へて時に、結婚は済んだかね、君のことだから」と、中折の色白な顔を覗く。「君のこつたからは御挨拶だ、ハハハ、とところが、まだ獨身さ」「細君聞題でも、引ッ張麻の格だらう、おう、さうだ」と、中尉は、口許を尖らせて心持ち小聲になり「君には慥か許婚があつたつけね、何んとか云つたつけ

「……」と、少し考へ、「初江嬢、さうだらう」と得意満面といふ顔、中折は、馬鹿な、と云ひさうな態度で、「意志のない結婚は罪惡ぢやないか、僕だつて、まさか罪の子にはなれないさ」「意志がない……、甘く云つてるせ、おい、おい」と、中尉は中折の脊中を敲いて、「知らばくれぢや可かんせ、神田の君の下宿で、屢々慥氣を聞かされたぢやないか、今だから自白するがあの時は實に弱つたよ、今に何うも肩が凝つて可かん」と、態とらしく中廣の肩を動かす。「冗談云つてら」中折は眞面目くさつて、「併しあの當時は僕は大人子供だつたよ、今更慙鬼の至りだ」「何故さ、理想的の女ぢやないか」「美は美だがなわ、斯う云つちや何んだが、東京にだつて彼れ位な美は少い、けれど、肝腎の教育が無いから厭さ」「天真爛漫ぢやないか、教育の手で、枝を撓められん處に眞の價値があるんぢやないか」「それが厭だよ、僕なんぞこれから社交場裡に出て、一花咲かせなけりやな

らぬ身上だ、それに無教育の嬌を逞へたのちや内助は愚反に邪魔をされる位だらうからね、それに何だよ、教育のない女は香のない花のやうなもので、直ぐに飽くよ、恰度この牡丹櫻のやうなものだ、見た目は、成る程パツとして、一時見る人を魅させるが、風韻が一向ない」「で、今は、何んな關係になつてるのか」「些ツとも逢はずさ、手紙を度々寄越すけれど、其字句が、全然なつて居ないんだからいよいよ鼻に附からぢやないか」「其奴は酷だ」と、中尉は語に力を入れて、屹と中折の方を見向く。

(二)

「無教育といふことは君も知つて居て、將來の約束もしたんぢやないか、今更、そんなことを云ふのは通辭だ、不可、いかん」中尉は重々しく首を掉る「だから、あの當時は子供だつたと云つてるのさ」と、中折は餘儀なさう

に微笑む。「殊に、俺と往來して居た時分の君の熱し方つたらなかつたせ、それを今になつて鼻につくなんて云ふのは、それは無慘だ、それは罪惡ぢやないか、そいつは何處までも可かん」「不可と云つたところで、僕の戀が冷めて了つたんだから仕方がないぢやないか」と、中折はまた笑ふ、中尉はますます「熱心」「それは君の得手勝手といふものだ、清淨な處女に、一生癒ゆべからざる重傷を負はせて、君は何とも思はんかね、可哀想とか、不憫とかいふ同情の念はないのかね」「まづ、ないね」と、中折はいよ／＼冷淡に構へて、花の隙から晴れた靑色の空を見上げる、「ない……ないとは彌々酷い、全然露西亞坊見たいな男だ」中尉は呆れて、物が云へぬといふ格好をしたが、直ぐに思ひ直したさまで「ハハハハ」と笑ひ、「まあ好い、こんなことを此で云つた處で仕方がない、何うだ、久瀧だから洋食でも食ひに行くか」「好からう、君とはいろは以來だ、何うかね、君、緩々して好

いのかね」「好いとも俺には女難はないから、大丈夫だ」「では、一つ、僕の處自慢の樓へ案内しやう」「そいつは有り難いが、いろはに於けるお千代然たる女を見せつけられちや白旗だ」と、「さう」と、中折も思ひ出して「快げに笑ひ」「君だつたかね、側杖を喰つて泣きつかれた奴は、ハハハ、」「笑ひ事ぢやないよ、閉口したせ、色男と同席すると、彼れだから恐縮する」かくて、二人は木隆を出て、青葉の萩の間を縫ひ、仁吉神社の方へ歩を運ぶ。長い中尉の劍は、晃々と春の日に白く輝いて、拍車に觸れては憂々と勇しく鳴つた。日は低く、松原の蔭の上に落ちて、立木の多い公園内は最う薄暗い蔭が宿して居る。仁吉神社の鳥居の前で一段と聲高に、叱りつけて居る二十一二の青白い書生がある、「おい、これを見い、今、店から買つて来たばかりの土瓶ぢやぞ、十二錢の土瓶ぢや、それが粉微塵になつたぢやないか、買ひ戻せ、さ、買うて戻せ」と、腕巻繰りをして、相手の胸を眩で

小突く、對手は十三四の子供である、筒袖の胸から裾を、土埃で白く汚しながら、両手で喉を摩摺つて居る、四五人の道行く人は、この二人を取り圍んで、興ありげに見物して居たが四十格好の商人體の男が溜りかねたかして口をかけた。「一體、何うなさつたのです」書生は胸を張つて、「此奴、全體生意氣です、私の土瓶を破りながら謝罪の一つも吐さぬではありませんか人間といふものは爾うしたものでちやない、あなたはそれで好むと思はれますか」「いや、別に好むとは思ひませんが、あんたよりも年の少ない子供のどだ、それが土瓶を破つたからと云いつて打ち打擲をなさることはありますまい、先刻から見居るのに、あんたは三つ四つ續けさまに叩かれた」「決して打ちません」「いや、打たんとは云はせん、私は現に見て居つた」「よし、打つたところで、あなたは他人の土瓶を破つて、それで好むと思ひますか」今度は商人と書生の喧嘩になりさうだ。

(三)

「破つた、破つたと好く云はれるが、此子が態とでも破りましたか」と、商人體の男は問ひ返す、書生は片唾を呑んで、「態と破つたと何時云ひました、態とではなくとも、此奴が居なけりや破れる土瓶ぢやないのです、詳しく云ませうか、今の前向うから」と、書生は東の方を指すその指す彼方から若い女が來かゝつた。「向うから、自轉車が走つて來ました、私は、それを避けやうと思つて、左の方へ寄りますと自轉車も何うした譯か左の方へ寄つて來ました、それで驚いて、避けやうとすると、此奴が其處に居て私と二人で轉んだのです、その時土瓶が破れたのだから、此奴が破つたも同じです、十二錢と云へば私には大枚な金です、二日のお菜代がわりましますからなア」「それぢや、此子を咎めることにはないぢやありませんか」云つて、商人は笑

ひ出した。「笑うて事が済みますか、書生は商人をぐつと睨んで、直に子供の方へ向き直り、「さア戻せ、買うて戻せ」と、前よりは一層厳しく攻め附ける。子供は唯、泣いてばかり居る。戻さんな」云ひながら、また、右手の拳を固めた時、「戻して上げますわ」と、時ならぬ優しい聲で二人の中へ割つて入つたのは、十八九の輝くばかり美しい女である。書生は、瘦せた蒼い顔を女の方へ向ける、商人始め居合す人は、悉く女の顔を見るのであつた。「十二錢で好いんですか」云つて、女は厚板の帯の間から、絹レースの銀貨人を取り出し金の指環を燦然と光らせながら、二十錢銀貨一つ摘み出して、「剰金は要りませんから」と書生の前に出す。書生の細い目は眞圓くなつて居る、商人は其眼を、輕蔑んださまで見遣つて「何うです書生さん、斯んなお嬢さんも世の中には在でなさるんですね」云ひながら、せ、ら笑ふ。書生は一旦固めた手を、チツク臭い頭に載せて、「あなたに爾うして貰ふ

ては、私が済みません」流石に書生は躊躇ふ。「好いんですから、お持ちなさいまし」「それに、僅な物のことですから、無理に戻して呉れといふのではないのです只、此奴の仕方が氣に食はんものですから……」云ひく、洗ひ晒した袷衣の襟を直しながら、量の多い、濡羽色の廂髪から、撫肩のお召の着附を、まぢく〜と氣味悪く噴めて居る、小さい、反鼻は、飢ゑたやうに得ならぬ女の香を嗅ぐのである。「嘘ですよお嬢さん、十二錢が欲しさに喧嘩を吹きかけて居るのです」と、商は人笑ふ、居合するものも皆笑ふ。「好いんですよ、ねお貴下、失禮ですけれど、何うかお持ちなすつて、本當ならお土瓶を買つて返さなけりやなりませんけれど」「と、と、と、どう致しました」「さ、何うぞ」と、女は云ふ、書生はもぢく〜しながら矢張ためらふ。恰度此時である「濱吉」の門を仲居女に送られながら、菖蒲池の手前へ顯はれた二人の男があつた。それは先刻の中尉と中折で、「何だ、喧嘩か」

と、中尉は先づ鳥居前の群を見ておい内田君、喧嘩ぢやないか」「さうかも
知れん、行つて見やう」二人は急ぎ足に群へ近寄る。池に架けた石橋の上か
ら仲居は二人を眺と見送り、「またお近い内に、内田さん、屹度ですよ」

(四)

「では、頂戴いたします」書生は女から銀貨を受けて、極り悪さうに袂へ
忍ばせたが、矢張愚圖々々と立ちかねて居る。女は子供の脊中に手をかけて
「もう好いの、泣かなくつても好いの、あなた、何處も怪我はしなくつて、
云ひ云ひ、衣物の埃を、手帕で羽叩き落してゐる、子供は聲を上げて泣き出
した。「泣くことはないではないか、お嬢さんがお前さんの爲めに、書生さ
んをやり込めてやつて下さつたのだから」と、商人は子供の泣き顔を覗き込
む。「何うしたんだ」中尉は何時の間にか群の中へ立つて居て、商人に斯う

聞く、商人は得意になつて、「なわに、何でもないことです、あの書生さん
が」ど、書生を指して「自轉車に衝轉がされて土瓶を打割したのを、折悪
く側に居た此子に塗り附けて、見る知らぬお嬢さんから二十錢引つ奪つたん
です」「嘘です、嘘です」と、書生は一步進み出る。「嘘ぢやない、此に居
る人は皆知つてお在でる」商人は鼻で笑ふ。中尉は醉眼を睜つて、書生をぢ
ろりと見たが「此子は、令嬢の弟かね」「ブラザーとは何です」と、滑稽
な目で中尉を見る。「いや弟さんかね」「なわに、今、通り合せられての
災難ですよ」内田と呼ばれた中折は、女の横顔を瞥と見ると、悪いものに
出逢つたといふ顔をして、中尉の腰の邊を小突きながら、聲を低く、「藤井
君、休せ、何だ詰らない」中尉は描いたやうな、女の袴脚を見つめて、
荒い、短い髻を捻つて居る。「い、往かう」それでも中尉は振り向き
もせぬので、「先へ往くよ」中折は三步ほど遠ざかる、「義侠な令嬢だね」

中尉は覺えず斯う云つて、始めて内田に氣附いて振り向き「おい、内田」内田は、酒に色附いた顔を蹙めて、中折の頭を振つて見せる、何も云ふなどいふ意味であらう。「まわ待てよ、廣島でも斯んな義侠心のある令嬢が居るか、頼母しいぢやないか」内田はいよ／＼顔を蹙めて、すつすと歩き出した。「内田君」藤井中尉は一段と聲高に呼ぶ。子供を賺して居た女の顔は、此時倍と内田の方へ向いて、「あッ、内田さん」内田は歩を早めて、見る／＼木陰に姿を隠した。中尉は意外に呆れた顔をして、沈と女の横顔を見て居たが「あなたは柳井さんと云ひませんか」女は只、黙つて居る、失望の色は歴々と眉の邊に宿つて見えた。居合す人の目は、内田の消えた才立の邊と、臯郷とした女の立姿とに、交る交る放たれて居る。「あなたは柳井初江さんとは被仰いせんか」中尉の聲に女は始めて氣付き、「はア、私初江でございます……」細柄の蝙蝠傘は、バタリと音を立て、初江の脚下に横つた。

「ははア、あなたが内田君の……泣いて居た子供が、手敏く傘を拾ひ上げて、初江の前に差し出したにも氣附かぬのか、初江の眼は只木立の方へ向いて居た。

(五)

薄暗い室に灯も點々、郡内の襟の上に胡座を掻いて息づく煙を吐きながら、額に皺さへ寄せて何やら思案に暮れて居るのは、此家の主人で日本銀行に勤める林岩雄といふものである。今客が歸つた跡と見えて、養益から茶器、それに主のない襟までも淋しさうに置いてある。隔ての襟が靜に開いて、只今歸りました」と闊越しに手を支いて、溫雅に辭儀したのは年若な女であつた。「おう、初江さんか、大分遅かつたね」岩雄の額はもう皺から放れて居る。「少し、道寄したもんですから」「いや、好い／＼、實は折角わ

んたを待つて居たところぢや、さあ此方へお寄り」と、空いて居る譯を勧め
 て、「今日は、いよく貴女の決心を聞かなければならぬ」初江は怖々膝行
 り寄。「るまわ、敷きなさい春にはなつたがまだ夕方は冷ゆるからね、初江
 は矢張襪を脱いで座り「小さん灯を持つて参りませうか」「いや、好い、
 まだ其程暗くもないから時に」と、岩雄は膝を向け直して、「今、仲人が往
 んだところぢやが、何うかの、まだ嫁入る氣にはなれんかの……斯ういふ
 と何だかわんたを追ひ出すやうに聞ゆるが、決してさういふ譯けぢやない、
 もう之れ、女の十九と云へば遅いとも早いことはないからね、それに、貴女
 は、早く身を落着けて、亡くなられた阿母さんにも安心させなければならぬ
 責があるのぢやから、此機を脱さず片附いては何うぢや賀殿の歳は少し若い
 が、両親が歴としてお出でだし、本人も却々の確乎者で、役所の評判も餘ッ
 程好い、私は上ない良縁と思ふが、何うぢや、矢張厭か」初江は黙つて返事

もせぬ、膝の上で手巾を弄りながら視上げて見ぬのであつた。黙つて居
 ちや分らないが、何うだね、まだ當分獨身で居ますかね、それとも賀殿が
 氣に入らぬかね」初江は依然黙つて居る。「何うだね初江さん、賀が氣に入
 らなけりや止むを得んが……」岩雄は少し笑つて見せる。「い、ね」と、
 聞ゆるか聞ゆるかの聲で云つて、軽く頭を振るのである。「なる程、すると
 縁附氣はあるんぢやな」少し、私に考へることがございますから縁談は少
 時見合せて下さいまし」初江は思ひ切つて斯う云つて、前よりも俯いた。
 「考へることがある……、では、何ぢやの、誰か約束でもした人があるの
 ぢやの、「い、ね」と又頭を振る。「それはない、妙ぢやねね」と岩雄は
 首を傾けて、沈と初江の態度を見つめる。御厄介になつて居て、こんな氣儘
 を云つては濟まないのですが、今少時、此儘にさせて置いて下さいまし、長
 くとは申しません、一ヶ月か、二ヶ月の間には、屹度決心をいたしますから

「一ヶ月か、二ヶ月……それ位なら、何とかなるが、初江さん。私は今度の縁談に逆上して居るのぢや、願うてもない縁ぢやからの、此機を外さず、一生身の落着きをつけた方が好からうと思ふ、それが阿母さんへの何よりの孝行ぢや、貴女の墓詣には私も感心して居るのぢやが、千遍の墓詣より、身の納りを附けたが、阿母さんは反てお悦びぢや、貴女に限らず、娘の時には得て魔の魅し易いものぢやで、夢にも、若い男の口に乗つちや可けないよ。口許へ當て居た手巾で、初江は両の眼を押さへて倒れるやうに疊の上へ俯伏した、忍び音に咽ぶ聲が洩れる。「まわ、貴下、何ですよ、この暗いのに火も點さず……おや、初江さんぢやありませんか」調子高な聲が不意に暗い室の隅から起つた、岩雄の妻の久子が、何時の間にかやら入て来て二人の後ろから、迂散臭い眼を光らせて居たのである。

(六)

「林」と楷書で書いた、丸い軒燈の前を日の暮時から往きつ戻りつする若い男がある。この邊は、町からずつと離れた淋しい場末で、前は廣々とした畑に列り、背ろは翁鬱と茂つた廬山の麓で、二階家は此處と、他に二三軒あるばかり、十七八軒の人家は、殆んど藁葺の平屋である。薄ら寒い風は畠の方から、肥料の香を吹き送つて、朧に霞んだ月は、もう大分高くなつて居る。男は、足音を忍んで柘穀垣の隙を索めて、四邊を見返りながら庭の中を覗き込む。垣の内は面白い枝振の松がぬツと、頭を擡げ、櫻や桃の花が、月あかりに夫れと讀まれる、と、葉摺の音さへ、手に取るやうに聞ゆる静な空氣に、玉を轉ばすやうな琴の音が、玲瓏として、此家の離座敷の方から起つた餘韻は長く、糸のやうに、山や畠に床しく傳はる。男は、惚々と耳を傾けた

糸の音の隙間々々には、若い優しい女の聲で、黒髪を誘つて居る。「黒髪の、結ばれたる思ひをば、……解けて寝たよの枕こそ……」男は、鳥打帽を眉深に冠つて居る、冷飯草履の爪先で、垣に添うて右へ折れる垣が陰をして姿が暗くなると、男は柴折戸の側に立つ、琴の音はまた床しく響く。「獨、寝る夜の仇枕……細はかたしく妻ぢやといふて……」キーツと微かな音がして、柴折戸か外から開くと、男に拔足で庭へ忍んだ。離座敷の圓窓の障子に、青色の明が射いて、廂髪の影が非乎と映つて居る。男は梅の梢を潜つて、窓下に身を寄せる。障子に袂を掛けて、細い眼を私と覗ける。「黒痴は女の、心と知らで、森と……更けたる鐘の聲……」谷底の水の流れか、濺吹く風か、と思はる、相の手の、妙な音が、まだ半ばを終らぬ頃であつた。母屋の縁から疋走つた女の聲で、「誰です、何誰ですか、そこから視目をして被居るのは」男はバタリと障子にと衝突つたが、慌

しく身を曲て、敏くも柴折戸の外へ逃げ出した、草履の音がばた／＼と垣傳ひに畑の方へ消れて行く、琴の音も確と止んで、灯を背中に浴び乍ら、窓から半身を庭へ向けたのは、初江である。「初江さん、琴なんぞ弾いて、御愉快ですわね」入口の戸が開いて、廊下へ立ち跨つたは久子である。「おやお母さん」と、初江は障子を閉めて元の座に直り、「些ども愉快なことなんぞありませんわ、あまり氣が快々するもんですから、鳥渡弾いて見ましたの云ひ、琴を床の間に立てかける「關はないで弾いて下さい」お樂みなとこそを重々お邪魔をして、本當に済みませんよ、ホ、ホ、」「あら何にも樂みなんて……」「ないとは云はせませんよ、先刻の二階の容子と云ひ今はまた若い男を忍ばせて、初江さんも随分、氣が多いですわねホ、ホ、隅へは置かせんよ」面白くもなく口先で笑つて、久子は火の氣のない手焙の側へ宙腰で坐る。

(七)

初江は座蒲團を久子に勧める、久子は瞥と見たばかりで、「今の方は、何誰ですか」「初江は眼を睜る。「そんなに、白を切らなくつたつて、好うでござんすよ、妙齡の嬢さんには有勝のことですわね」初江は、術なさ、うに俯いたが「先刻の音は、誰か来て居たのですか、私、ちつとも存じません」久子は空嘯いて、「知らない方が何で窓下まで被來るものですか、恍けるにも程のわつたものですよ」今度は獨語のやうに「あんな方があるんですもの、縁附けないのも無理はありませんよ」「あら、あんなことを、小母さん、それは酷いわ、私、些ども知らないことでもすもの」「それやア、私は酷うでござんす、とうせ、良人のやうに、優しくは出来ません、これが私の性分ですからね」目に角を立て、いふ。初江は只俯いて、下唇

を沈ど囁んだ、「口が利けんでせう、辯譯があるならして御覽なさい、悪いことは出来ないもんですよ」それからまた、獨語のやうに「犬でも三日飼へば、三年の恩を知つてゐる、況して人間でゐて、四年も飼つて貰つて恩を仇で返す……」久子の額には青筋が浮いて、底光のする眼は怖ろしく輝いた。「初江さん」と、改まつた聲で、お弟子ではありますかね、束修も、月謝も、加之に追善料でまお拂ひ申して居りますよ、いくらお師匠さまだつて、金を出さなければ教は下さらないでせう、して見れば商買も同じ賣手に買手と云つたやうなものですね、それを、さうく恩に被せられちゃ、誰だつて遣り切れやしませんやね、斯うしてあなたの、面倒を見て居るのは、眞の義理一片なのですよ、その義理も人情も忘れて、好くやまわ、彼んな眞似が出来たものですね、呆れて、物も云へない」初江は依然黙つて居る、久子は好い氣になつて、「あなたの爲め好かれと思へばこそ、良縁の媒

介をしやうと骨折つて居るのに、人目を忍んで男を引き入れるなんて、本當に驚き入りました、お容色の好い方はそれで立つて行きませう、これが自分の子で、もあらうものなら、それこそ何うしてやるか知れやしない、阿母さんが阿母さんなら、お子さんもお子さんだホ、薄氣味悪く笑ふ。初江は、亡き母の上まで引き合ひに出されたのが、何よりも口惜しいかして、阿母さんといふ聲を聞くと、ハラ／＼と熱い涙を膝に零す、それを見ると流石に久子も口を噤んだが、少時するとまた。「前刻の若い男は誰れ、初江さん、私にだけ被仰いよ、誰にも云ひはしないから、それに、事と品によつてはその方を取り持つやうに、良人へ話して上げますからと、輕蔑んだ眼を笑はせて、初江の頭をチロリと見る。初江は、袖口で眼を押へて、おろ／＼した聲で、「私、夢にも、知らないことなんですもの」。初江の後、窓の下に通の手紙が落ちて居るのを、久子は目敏く見附けて、及び腰に拾ひ上げる

「戀しき君へ」久子は裏表を灯に透かして「これは艶文ぢやありませんか」「わ、ッ」濡れた眼に不安の色を宿して倍と手紙を上目に見る「こんな證據が上つて來ました」そこへ、主人の岩雄が入つて來た。

(八)

「良人、これを御覽なさい」久子は手紙を見せて「こんな人があるんだもの初江さんが何でお嫁になんぞ、行くものですか」「莫迦をいふものぢやない岩雄は久子を睨め附けて、悠々と入つて來る。「何が莫迦です、い、ねさ、何が莫迦ですよ」久子は額の青筋を、いよ／＼虫腫に浮かせ、「こんな手紙が來る位ですもの、いくら骨を折つたつて、初江さんに縁附く心はないと云つてるのが、何で馬鹿なことですよ」「それが莫迦ぢやないか、初江さんはまだ縁附くとも縁附かんと云つてや爲ない」「一月でも二月でも、待てど

被仰るのは其氣がないからなんでせう、い、わ、女の心は女でなげや分りませんよ、良人に分つて溜るものですか」「好しく、私には分らん、お前が一番好〜知つとる、それでな久子、お前もう用は濟んだのか、濟んだら彼方へ行つとつて呉れ、少し、初江さんに話すことがあるから」「い、わ、行きますせん、良人は直私を邪魔になさる、それ程邪魔になるなら、寧ろ離縁して下さいよ」久子は身を揺つて兩手で顔を掩ひながら、聲を立て、泣き出す。岩雄は持て餘して「困つた奴ぢやなア」と眉を蹙める。「可笑いでせうそれや笑止いに違ひありません、私が知るまいと思つて、好いた眞似をなさるんでせうが、私は丁と知つて居ります、久子は濡れた眼を血走らせて、「良人はお弟子といふばかりで、初江さんのお世話をなさるのぢやありませんまい奈加子さんと關係をして、情に絡まれて厄介を見てお上げなさるんでせう、い、わ、知つてますよ、それさへあるに、初江さんまでを何うかしやう

と思つて居るんでせう、そりや男子だから、何んな浮氣でもなさるが好いさけども、皆の川の前で好いた眞似を見せられちや、家の内が納まりません、私だつてさう〜馬鹿になつちや居られせんから、寧ろ離縁して下さいよ、云ひながらまた泣き立る。「何んぢや、初江さんを何うかする……一度云つて見、云ふことに事を缺いて奈加子さんと關係がある……」岩雄は血相變へて、信と久子を睨め附けたが、直ぐに思ひ直して何々と笑ひ、それが、お前の病氣ぢや、疑ふなりと信じるなりと、勝手にするが好い、また離縁が所望なら何時でもして遣る」「さうでせう、離縁をした方が勝手に好いでせう、く、口惜しい」「お、勝手に好いかも知れんよ」初江は、只おろ〜して居たが、「小父さん、何うぞ、そんなことを被仰らないで下さい、小母さんもうかもう被仰らないで下さいましよ」「江初さん、打捨つといて下さい、あれが病なんだからね」と、岩雄は云ふ。「その病は、皆、

お前さん達の所爲ですよ」と、きつと初江を睨むのであつた。岩雄は堪へかねて立ちかける、初江は久子を庇ふやうに遮つて、「小父さん、皆私が悪いんですから、何うぞ、何卒お許し遊ばして……」
 「私は宜しい、何と云つても介ひません、蟬入前のあなたに難辭を付けちや濟みません」久子はせ、ら笑ひをして「くん、難辭が聞いて呆れる、そんなに云ふならこれを御覽なさい」云ひさま、手紙を疊の上へ叩きつける。「何をやるツ」岩雄は盪乎と立つ、初江は両手で岩雄の胸の邊を支へて、「小父さん、堪忍して上げて下さい、小母さん、私片附きます、明日にでもお嫁に参りますから……」
 後は涙に咽ぶのであつた。

(九)

離座敷には初江が獨になつて居る、岩夫夫婦の出で行つた跡を、尙は念の

爲めに確めて、間の扉を内から開き、氣拔けのしたやうになつて居たが、やがて一ト足、一ト足と窓近くへ寄り佛と、足許の手紙に目を附けて、若しやとでも、思つたが、手に拾ひ上げ、丁と坐つて、裏返へして見る、封皮に名は書かれず、只御存じよりと記してある。初江は長い吐息をして、手紙をハラリと疊に落とし、右手を内懐に挿入れ、左手で乳房の邊りを押へ、頭垂れてまた吐息を吐く、眼は濡んでゐる、顔は蒼褪めて居る、影は脊の壁に映つて、暫くは身動きもせぬ、初江は何と思つたか、一度首を傾けて落ちて居る手紙を呢と見たが、また、若しや、とでも思つたか拾ひ上げて沈と見る「矢張、違ふわ」袖口で睫毛を拭いて「私や、嫌はれてるのよ」眼を押へて涙を噉る。それでも、また思ひ返へして、初江は手紙の封を切る、長々しい文句が、半紙二枚へ書いてあつた。「私は、今日、二葉公園でお目にかつた一寒生です、私は、あなたから二十錢貰ふ義理ではないのですが、あな

たのお情に甘へて、忝なく頂戴いたしました、それ以來、あなた的美しいお顔が眼にちらついで……」云々の文言の終には、戀しき令嬢さま御許へ一寒生田萬里仙九郎としてある、初江は好くも見ずに片々に引き裂いて掌で丸めて、疊へ放り附けて、泣とした眼で灯の火を睨めて居る、その眼から白い玉がハラ／＼と光つて、蒼白い頬を落ちる。「やがて初江は立ち上つて帯を引き締め、後れ毛を掻き上げて、丸窓の障子を細目に開け、月明の外を眺めたが、忍びやかに庭へ下り、芝生、露を踏分て、月に顔を反向けながら柴折戸を潜つて出る。雪の脛に、緋の蹴出がチラホラして、初江は夢のやうな春の夜、朧な月を踏んで道を迷ひ歩く。

「其處に居るのは誰れぢや、お松さんか竹さんか」内田家の出入の者で、八造といふ男が脊戸口から入つて来て、勝手の暗い廂の蔭に、悄然と立つて居る人影を見附けて斯う云つた、人影は返事もなく、月の明を避けて、烏鷺

しながら、庭園の方へ行く。「誰ぢや誰れぢや」八造も一段聲を高く聞く、それでも矢張返事をせぬので、「皆さんお氣をお付なさいませ、怪しい奴がお庭の方へ忍び込みましたぞ」これを聞いて、勝手口から飛び出したのは五六人の若い者である。「何方へ行つた」「遁がしてはならんぞ」若者は手々に柄物を引提げて、月に透かして四邊を窺ふ。「それ、あの足音ぢや、泉水の方へ紛れ込んだ。八造は呼ばはりながら追ふて行く、混棒、洋杖を提げたふたりは左へ廻はり、薪丸太を持つた二人は右へ尾ける、「何だ／＼」と座敷の縁側に顯はれたのは、此家の若主人内田一郎であつた。

(十)

彼の人影は初江である。初江は、林家を迷ひ出て、知らず識らず内田の脊戸口に佇んでゐた、機好く一郎に出會したら、身の所置も相談し、首尾よく

行けば、此儘引き取つても貰ひたいと思つて居たのであるが手紙の返事のないと云ひ、公園での情ない仕打と云ひ、四年前の約束を反古にして、自分を袖にして居るのかも知れぬから、その邊は好く慥めて、身の定りを附けなければならぬと云つたやうな、考へもないではなかつたが、それよりも只懐しい、戀しいが先に立つて、我にもわらずこの庭園へ忍び込んだのであつたが、運悪く荒くれ男に見附けられて柄物を提げて追ひ立てられたのであるから、初江は涙さへ出なかつた。その戀しい懐しい人が、今日の前に立つて居ながら、寄り添ふことも出来なければ、詞一つかけることもならぬ運命になつてゐる、それも仕方がないとして、自分はこの人の爲めに、辛い、哀しい憂き目を、見通しに見てゐるものを今の詞は、まわ何といふ恨めしい口であらう、母には死別れ、兄弟も親戚もない、孤兒同様の此身は、只、一郎を杖と柱とも頼んで生きて居るのである。冷たい近頃の仕打を、察せぬでは

ないよく胸には應へて居る、けれど、自分は何處までも約束の詞を守つて、腹では最う、内田の妻となり、學士の奥さまとなり濟ましたやうな心で居る、それを、敵でも見附けたやうな、今の口上はいかに、憎く腹立たしいと、初江は斯んな想が胸に沸いた、けれど、今は爾んなことを考へて居る隙はない、追手は犇々と兩側から追つて来た。「遁がすな」「叩き殺せ」互に聲をかけ合ひながら、荒々しく探り寄る。江初は氣が氣でない、大勢の人の前で顔を晒すのは死ぬより辛い、逃げるだけは逃げて見やうと、吐胸を極めて、木の下に身を寄せ、息を殺して忍んで居る此時月は雲に隠れて、朧な夜はいよく朧ろになつて来た。初江は、亭の床下へ身を隠す、「逃げたか」「居らんな、何時の間に逃げたらう」聲は亭の前である。床下から五六本の足が見ゆる、初江は我と我が身を抱き締めて、小さく、固くなりながら眼を瞑つて一心に神の救ひを念じて居る。月は、また雲から顔を出す、四邊

は前よりも明るくなつて来た。「さア、居るぞ、さア居るぞ」「こんどこそは逃がさぬぞ」若者は亭を取り圍んで、手々に柄物を斜に構へる、月の明りに何物かを見たのであつた。

(十一)

初江は絶體絶命である。「捕つたかい」云ひながら駈け寄つたのは一郎である、結城紬の袖を巻繰つて、右手に仕込の洋杖を提げて、亭の側に立ち跨がる。「最う袋の鼠です」「床下に隠れてるんだな」一郎は月明に透かして、床を覗く、初江は生きた心地もせず、穴でもあつたら、入りたい氣をしながら覺悟を決めて、床下から這ひ出ると、月の下に立つたまゝ、半帕で顔を覆ふ、漆の髪に、雪の襟、柔か物の衣の色が、朧るな月の光が浴びて艶に、床しく、スラリとした形である。「やア、柳井さんのお嬢さんぢや」

と八造は思はず呼んだ。「お嬢さんか、こいつは不思議ぢや」「何の事ぢやい」若い者は構へを崩して、初江の前後を取り巻いた。一郎は其れと聞くより急卒と座敷の方へ引ツ返した。「初江さん、わなたまア何うなされたのです、人騒がせにも程のあつたものですよ」八造の聲に次いで、「私や、また泥棒かと思つて、命がけになつて居た」若い者は口々に、云つて居たが一人去り二人去りて、跡には初江と八造ばかり悄乎として取り残される。「まわ此方へお來でなさい、そこに立つてお居ても埒は明きません、若旦那も學校を卒業されて今では宅にお居でになります、始めから名乗つてさへ下さりや斯んな騒ぎにもならん所です、これには理もありません、まわ、此方へお來でなさい」初江は八造の後から、とぼくと尾いて行く。「まわ、初江さんでございましたか、私はまた泥棒かと思つて、今も齒の根が合ひませんよ、さあおかけなすつてと、椽側に座蒲團を持ち出して初江に勸

めるのは一郎の母親お俊である。「林さんへお出でになつて、お變りはございませんか、林さんも皆御達者ですか、早いものですねね、お隣にお居でなすつたのは昨日のやうに思ひますのに、もう阿母さんがお亡くなりなすつてから四年ですねね、あなたも見ちがへる程大きくおなんなすつたよ、あの頃は一郎が生まれて毎度お邪魔ばかりして居りましたがお蔭で今度學校を出ましてね、今では學士でございませよ、ホ、ホ、少しはお遊びにお出でなさい、彼れが御相手をいたしますよ、林さんへも一度何はなげやならないと思ひながら、つい失禮して居ますのでね、今ちや閨が高くなつて削つて職かなげりや跨げないやうになりましたよ。お俊は一人で喋つて居る、椽の雨戸は二枚だけ開いて、五分心のランプは、赫々と江初の全身を照らして居る、初江は顔も得上げず、伏目になつて、牛帕で眼を押へたり、口に啣へたりして居たが、此時やつと、オロ／＼聲で、「小母さん、私、一郎さんに御

相談がわつて参つたのでございませよ……」。店では、八造までが仲間に入つて、未だに泥棒の話で持ち切つて居る、暗い襖の蔭から女中共が、初江の姿を覗いて見て、何やら囁き合ふ聲がする。

(十二)

「一郎に御相談が……、さうですか、それならそれで、表口から来て下されば、何も騒ぐことはなかつたものを、裏口から被仰るものだから、飛んだ膽を冷しました、ホ、ホ、併し表口は店の者が大勢居ますからね、無理はありません、では、鳥渡お待ち下さいまし。お俊は一旦姿を消したが、また元の坐に居直つて、「まわ、お上りなさいまし、そこちや何ですから、ね、初江さん」とお世辭を云つて悻に今爾う云ひましたかね、彼れもまだ子供ですよ、何の相談か私に聞けと申すんですよ、二十五にもな

つてまだく世話が焼けますよ、ホ、ホ、ホ」「あの、鳥渡で好いんですが、お手間は取りませんから」と衛なさうにいふ、「さうでせうともねね、一郎も一郎ですよ、御挨拶丈にでも出て来れば好いのにわれて、髯なんぞ生えて、紳士氣取りで居るのだから可笑いぢやありませんか、髯なんぞお休みなさいと云へばねね、これが僕の財産ですとさ、坊ちゃんの前には好い氣ですよ、ホ、ホ、」初江は、焦搔しさうに「二度とお目にか、れないか知れないのですから、鳥渡でも好うでございます、お逢ひ下さいませんでせうか、ね、小母さん」云つて、初江は胸を詰らせる、「何處か被行るんですか、遠方へなど行らつしやるなよ、矢張、林さんの宅に被居いよ、その方が貴女のお爲めです、奥さんは少し神經家の方ですけれど、林さんは彼れで感心な男氣のある人ですから、貴女の身の定まるまでは、辛いことがあつても耐つて被居いよ、其方が行末のお爲ですよ」「小母さん、一郎さんは逢つて下さいませ

んでせうかねね、云つて、半巾で涙を堰止める。「まあお待ちなさい、も一度云つて見ませう、何でも、藤井さんとか被仰る軍人のお友達が見ねるかど云つて居ましたか、ま、待つて被居いよ」お俊はまた立ち上る、初江は長い間待たされたが、やがて出て来るのを見れば這度もお俊一人である。「初初さん、あなた一郎にお約束でもなすつたことでもおありなさんですか、悴は爾んなことを云つて居りましたよ、約束のことなら、何れ人を中へ入れて林さんまで返事をする積りだつてねね、貴女も御勉強なさらなければ好けませんよ何處へお嫁入なさる分にしたらどろが、當世の娘さん方は、學問がなくつちや一向駄目でございますからね、容色さへ好ければ、昔は玉の奥へも乗つたものですよ、今は却々、そう行かんさうですよ、財産があつて、學問があつて、夫で漸と一人前といふのですから、本當に六ヶ敷い世の中になつたのですよ、初江さんなど、琴が堪能でお居でなさるからこれ

から何んな出世でも出来ますよ、それに容色と云つたら評判の方ですし、軍
 人であらうが、商賈人であらうが、好いた處へ嫁けますよ阿母さんが生きて
 お居でなすつたら、何なんにかお悦びで被居いませうものをねね、今お幾
 歳です……あの時が十五でお居でしたから、今歳は十九ですねね、今が
 娘盛りの、花なら六七分咲いた見頃といふところですねね、一郎は妙女子
 で、容色よりも、學問の上達した女が欲しいつて、さう申して居りますよ、
 當世でもないねねホ、ホ、」小母さん……」初江は立ち上つて、只一ト
 目でもお目にかゝつて……と思ひましたが……」初江は聲が出ないので
 ある。「何うぞ、お軀をお厭ひ遊ばして……一郎さんに……初江がお暇
 ……」臆は涙に咽せて了ふ、お俊が、若しやと、氣の附いた頃には最上
 其處に初江の姿が見えなかつた、月は臙に霞んで、庭の櫻花のボロ／＼と散
 るのが見えた。

(十三)

白島、内田家の裏門から、魂が出歩くやうに、ふら／＼と道を廻るのは
 初江である、徐々と吹く夜風は、亂れた鬚の後れ毛を吹き、白い脛は素足の
 ま、冷たい露を踏み碎いて、公園を東に急ぎ、東照宮を左に見て、春草の
 生ひ茂つた、野中の小徑を墓場の方へ歩いて行く、其後から見隠れに、
 尾いて来る男がある、草履の音々々、帽は眉深に、顔の半ばを埋めて居
 る。「阿母さん……」初江は唯ある墓標の前に立ち止つた、覺えず云つた
 摺鉢を伏せたやうなお寺の屋根は近く鼻先に見え、深緑の常盤木は只黒く
 月に洗んで、風さへ寝沈つて居る、青葉、若葉を透して洩れる月明に、初
 江は昵と墓を見つめて、「私も行つてよ、阿母さん、私、あなたのお側へ行
 くわ……」熱い涙がハラ／＼と零れる初江は墓前に丁と坐つて、「教育の

ないものは駄目なんですと……。阿母さんも後悔すると被仰つたわね、私が學問が厭だつたから、お母さんにも心配をかけたわね、今は後悔して居るんですけれど、もう駄目よ、生れ代つて來なければ……。」と吐息をつき、今歳はねね阿母さん、學士の奥さまになつて、一郎さんと一緒にお墓詣りに來て、阿母さんに安心して戴かうと思つて、そればツかしを樂みにして居たんですけれど……。」、初江は、もう、口が利けなくなつた、袖口を切つて、また更に涙に暮れるのである。「私は嫌れてよ、學問がないから嫌はれてよ、今からでは遅いわね、私、阿母さんの處へ行つてよ……。」

初江は土面に坐つたまゝ、腰の細帯を解き始める、頭の上では小鳥が、バタ／＼と羽搏く、鳥打帽の男は足音を忍んで、木陰に低く腰を曲めて潜む、この外に今一人、初江の獨語を立ち聞いて、同情の涙に咽ぶ男があるのを、初江も、鳥打帽も一向氣附かぬのであつた。初江は細帯を手繰つて、右手に

持ち茫とした、眼で、空を見上げる、百日紅の曲つた枝が、天蓋のやうに墓の上を覆ふて居る初江は引き延ばされるやうに立つて足元覺束なく、左右から枝振を見上げる、眼には涙が乾いて居た。「お嬢さん」と、聲をかけて初江の袖を捕へたのは前刻の鳥打帽である、初江はそれが不意なので、飛び上る程驚いたが、捕られた袖を振り離して。「何をなさる」「私は、先程手紙を差し上げた一寒生田萬里仙九郎であります、大抵私の意中はお分りになつたでせう、何ういふ譯か存じませんが、及ばずながら、お力になりませう、私の心もお察し下さい」云つて手を取りかける、初江は其手を避けて、「厭です、厭です」「貴方は、私の親切がお分りになりませんか、私の心中を可愛想とは思つて下さりませんか」云ひながら初江の肩に撓垂れり。「何をなさる」「さう、御立腹なされることはありません、私はあなたに貰ひました二十錢を、あなたと思つて膚身に確乎と附けて居りますそれでも私の

心がお分りになりませんか、田萬里は執濃、縋り附く、初江は懸命に抵抗する、其時緩んだ初江の帯の間からぼそりと、脚下に落ちたものがあつた。田萬里は目敏く其れを見附けて、つゝ拾ひ上げる、「そ、それは阿母さん、……」初江は取り戻さうと焦る。田萬里は包みの結び目を解く、恰ど此利那である。「馬鹿野郎」叱咤の聲と共に、田萬里の横面を健に打擲つたものがあつた。

(十四)

「馬鹿野郎」鐵のやうな拳を固めて、田萬里の横面を思ひ切り張り飛ばしたのは、藤井陸軍中尉である。「痛ッ」云つて、田萬里が右手を頬に當てる、と、手に持つて居た包が地に落ちる包の結び目がはらりと解けて、時ならぬ卯の花色の慶長小判が五枚、月に燦然輝いた。それは亡母の片見の金であつた。

た。「失敬な」田萬里は、細い目を三角にして居る。「何が失敬だ」燃黒い中尉の顔に、眼が怖ろしく光つて居る、田萬里は膨れて、何やらブツ／＼云ひながら中尉を睨て居る、藤井はちつとも取合はず、「初江さん、僕は藤井行雄です、内田から貴嬢のことは度々聞いて、陸ながら同情して居るものです、今夜も内田を訪ねて、圖らず貴嬢のことを聞きました、御婦人のことだから、若しものことがあるかも知れんと思つて、實は貴嬢のお跡を附けて來ました」と、田萬里をグツと睨め附け、「まだ其處に居るなッ」「いや、なに、歸ります」と、後巡る。「歸れッ、貴様に用事はない、愚圖々々するとまたお見舞ひするぞ」藤井は拳を固める、田萬里は逃げ足で、中尉を上目に見つめ「切江さん、私の心中は好、お分りになつて居りませう、私は何時でも……」。「歸らんかッ」中尉は二三歩踏み出す、田萬里は初江に心を残しながら、寺の本堂の方へ消れる。「初江さん、先刻の御述懐は残らず聞きま

した、僕は實に同情に堪へんです、併し、これが反て貴嬢の行末のお爲かと思ふ、内田のやうな冷淡な漢と結婚なすつたら、一生あなたは泣き續けですそれが向うから破約したのは、貴嬢の爲めに非常な幸福であつたと思ふ、亡くなられた阿母さんも、其方をお悦びであらうと思ひます、それから、先刻のお詞では、學問でもしやうといふ思召しがわるやうに聞きました、若し、心底さういふお考へがあるなら、今からも決して遅くはないです、おやんなさい、八十の手習ひといふ例もあるんですから、十八九から學に志すといふは少しも耻とするに足りません、まだ、遅れたといふ程でもありません斯う云つては失禮ですけれど、學資の御都合が悪くば當分僕の叔父の宅に被居つたら好いでせう、僕もまた、あなたのやうに早くから兩親に別れて、叔父育ちの獨者です、叔父の宅には貴嬢より三才ばかり歳上の女が居ます女學校を卒業して、今遊んで居るんですから、勉強なさるには何かと便宜

なことがあるだらうと思ふ、土地は大阪です、貴嬢さへお得心なら何時でも紹介します、些とも氣の置ける宅ではないですから、御心配はありませぬ、そして、大に學んで、大に社會に活動して、内田なんぞ見返してやらなければ、好けない、その方が阿母さんへの孝行です、今、狭い童見を出して自殺なんぞして御覽なさい、世間からは物笑ひの種になつて、此處にお居でなさる」と、藤井中將は右手の墓標を指して、「お墓の下に被居る阿母さんにまで、不名譽の譏を貰はせるやうなものですぞ初江さん、お分りになつたですか、初江は、沈と點垂れてばかり居る、藤井は脚下の小判に目をつけ、「これは貴嬢の物でせう……」母が亡くなりなす時分、私に、母だと思へど云つて片見に呉れましたのです」半帽を口へ啣へる、「これが阿母さんのお救ひです、阿母さんの肉體こそ墓の下に眠つて被居るが、靈魂は何時までも貴嬢の側に付き添つて事毎に守つて被居るのです」「母も、眼を瞑

「折、貴郎と同じ言を申しました」「では尙のことです、貴嬢は復活しなければなりません」初江は倒れるやうに藤井の脚下に膝を支いて、「私は救はれますでせうか……」云ひさして、初江は泣き崩折れた。

(十五)

大阪、桃山の赤十字病院近傍で、村山さんと云へば誰れ知らぬ者のない、立派な邸宅がある主人は彌八郎と云つて名だゝる實業家であるが、大阪市會議員といふ名譽職さへ擔うて居る、此室の西向の十疊で、主人の彌八郎は十八九の女と差向ひで坐つてゐる。「失禮させて貰ふ、何うもお見かけの通りな軀ぢやから、坐つて居るのが何より苦しい」と云つて主人は張り切れさうな膝を胡坐に掻いて、右手で茶碗を取り上げる、「何うぞ、お樂に遊ばして女は忤々しながら、後から詞を添ゐるのである。」「貴嬢が初江さんといふ

のかな、お歳は……」「十九でございます」「十九、これから勉強しやうといふのぢやな、好からう、今日の時世は、何うしても學問がないとあかん男子は無論ぢやが女子でもさうぢや、併し、やり損ねると宅の縁のやうになつて了ふ、は、は、は」と罷のない口を開けて笑ひ、「學問は必要ぢやが、學校へ遣るのは、善し悪しぢやよ、宅でも、家庭教師を雇へば好かつたと後悔して居る、私は、前からさういふ意見であつたが、何さま家内が聞かんものぢやから、そこへ、家内の邦子が入つて来る、私が、何いたしましたと云ひながら、良人の横手に坐つて、品の好い顔を笑はせる、江初は襟を脱して、「貴女が、奥さまで被居いますか、私は初江と申しますと……」初對面の辭儀に及ぶ、邦子は軽く受けて、貴嬢が初江さんですか、行雄からの書面で詳しい事情は聞きました、毎度行雄が御介厄になりましたさうでさア、お敷きなさい」「嗚、邦子、今も云つて居るのぢや、お前が私のいふ

ことを聞かんで縁を學校へなぞやるもんだから、氣儘で始末の終へんことに
 なつて来た、私のいふ通り家庭教師に任した方が好かつたものを、妙な眼附
 で主人がいふ、「まだ、そんなことを被仰る、娘の教育は母親の役目ですか
 らね、私に任せてお置きなされるのですよ、良人の様な主義で娘を教育した
 ら、それこそ因循になつて、世の中へは歩も踏み出せなくなつて了ひます
 氣儘は良人が甘やかしなされるからですよ」「さうかい、すると、また一本や
 られた形ぢやな、は、は、は、何うで娘には勝てんものと見える、初江は垂
 頭むねいて笑つて居る、「時に、初江さん、學校へ行く分にも、宅で稽古をする
 分にも、何うせ二三年は此邸で寢起をするのぢやから、氣を寛げて、居らに
 やならんよ、そでないど辛抱は出来ん、家の者といへば、私等夫婦に娘の、
 縁、外に腕白者が一人居るが之れは家内の實家へ預けてゐるから、まわ三
 人切他は皆雇人ばかりぢやから、少しも氣兼ねをすることはないよ」後

は邦子が引き取つて、「全くですよ、氣兼ねをしては貴嬢の損です、私も
 娘が一人増えたつもりで、時には用事を命合るかも知れませんが、その
 時はちよいと手傳つて下さいよ」「用事などは、何うでも好い、女中も二
 三人居ることぢやから」と、彌八郎が口を挿む、「いね、何うぞ………まて
 どに………不束者で、一向氣が附きません方でございますから」と初江は右
 手を疊へ支く、「用を云ひ附けた方が、反て心配がなくて好いものです、私
 も覺おぼえが有りますが餘り客扱あまきやくあつかひにされると、却て居辛いものですよ」「そ
 んなものかなア、いや、また一本参つたのか、は、は、は」と、彌八郎は快
 活な男である。

(十六)

「其れから學校の事ぢやて」彌八郎は妻の方を向いて云ふ。「さうですわね

其方は縁に相談した方が好うでんすよ、學校のことは縁が詳しいから」
 「それもさうだ、ちや、私は引つ込むとしよう、初江さん、軀を寛げるが好い、學校の相談は緩出來」るよと立ち上る、邦子は見上げて「あなた、彼方へ被居るのですか、縁が歸つて居ましたら此方へ来るやうに被仰て下さい」
 「諾、諾」彌八郎は出て行く、入りちがひに入つて来たのは縁子である。縁子は、二十一二で、母親似の瘦せぎすな、面長で丈がすんやりして居る、少し赤茶けてゐるが量の充溢した髪を、夜會で結んで、桔梗紫のりボンに金の輪櫛を飾つて居る、着附は些と派手過ぎるが、品は初江の晴れ着にもしたくないやうな金目づくめで、香水の匂を分々とせさせて居る。初江はハツと少し顔を赧らめながら坐を居行る、邦子は迎へて「縁さんか、大さう早かつたね」
 「縁は坐に着き」不斷着に着換へたもんですから「お嬢さまで被居いますか」と、初江は叮嚀な初對面の挨拶をする。貴嬢が初江さんと仰被

る方……、さう、私が縁です、行雄さんからのお手紙で、あなたの事は承知して居ます、御勉強なさるお積りなんですつてねわ」
 「迎も駄目だらうとは存じますが、志だけはございますので……」
 「初江は伏目勝である。」「志さへあれば、何でも出來ないことはいりません、併し」と、縁子は初江の年格好を判じて「學校へ被行て辛抱が出來るか知ら、何故……」と邦子は横から口を覗ける、
 「何故でも」と、縁子は母親の方を振り向いて、「皆な歳の少い人ばかりなんですもの、二年や三年へは迎も入れないから、まわ一年でせう、一年と云へば、皆十三四の子供ばかりなんですもの」
 「邦子は類に肯首く、親の眼からは、生れ附いた美しい初江の田舎臭いのより、撓めに撓めた縁子の都風なのが、比べものにならぬ位な憶々と、見られるので、娘の云ふことは一も二もなく感心する、腹の底から肯首いとして、「さうともねわ、だから、お前さんに相談しなくちや分らないのさ」。縁子は、氣

恥かしいやうな、振で、私だつて分りはしないけれど、私は辛抱が出来ないと思ふわ、最初は兎に角ね、一年も二年も居る内には、屹度厭になると思つてよ」初江も、半帕を膝上で弄りながら肯首く、「尤も、刺繍とか造花とかの専門だつたら、お伴はイクラもありませんよ、だけと學問の方ちやねね、夜學へ行くのも可笑しいし」「そこもわるねね」と邦子は云ふ、初江は困つたといふ如に俯く。「まわ、當分遊んで被仰いよ、その間に何とか好い智恵が出るかも知れないわ、そして、其間遊んでるのが何んだつたら、私の知つてることだけは何うにでもして教へて上げますわ」「さうして與けてお呉れね、邦子も口を添へる、初江は心底嬉しい表情で、「何うぞ、さう遊ばして下さいますし」と兩手を仕く「さうなれば、私も、お伽が出来て都合が好い」と云つて、莞爾と笑つて、立上り、「大さう熱いやうねね、阿母さん、縁子は明い障子を開ける、庭園の櫻花は、もう薙ばかりになつて居る。

いて、鶯の羽根の如な新緑の植込、水晶を手繰る様な池の噴水を、呪と噴めて居ると、「縁さんや、初江さん」と呼ぶ聲が、廊下の方から足音と共に近よつて柱の蔭から邦子は顯はれた。「もうお稽古は済みましたらう、さわ今日は大變ですよ、と落附かぬ振である。聲を聞いて、初江は顔を上げる。その顔は濡れて居た。「今晚お客さまがあるのだから、二人共お湯へ行つて被來い、そしてお化粧もなさいませよ」といふ母を顔見上げて、「何ですの、阿母さん、お客さまですつて……そして、私たちがお給仕に出なくつちやならないんですか」「さうですとも、お給仕ばかりぢやありません、二人で琴と胡弓の合奏をしますので」「二人で合奏……」縁は眼を瞼つて初江を見ながら、「まわ、厭ねね」初江は濡れた顔を拭き、縁を見返へす。

もありません、禮儀作法だつて心得てるし、茶から生花、女の嗜むことは大抵知つてゐる、お前さん方は何うです、軀ばかり大きくつて何一つ出来はしない、偶のランプの掃除をさせると直ぐに粗忽をするそんなことで上女中が勤まりますか」云つてお松の銀杏返へしを、ちろりと見て、「初江さんの、爪の垢でも煎じて飲むが好いよ」「何うも相済みません、以後は吃と氣を附けます」「この度ばかりではない、これまで黙つて居たけれど、何彼と粗忽ばかりなさるお客さまの前へ出た時の作法は何です、大體、お前に限らず、お梅でもお蔦でも皆好けない、初江さんが縁子に學問を教はるやうに、お前さん方も初江さんに就いて禮儀作法でも教はりなさい、「はい」「はいではない、さうなさい」「さう致しますでございませす」お松は幾度も頭を下げる「ホヤのやうなものだから、好いやうなもの、これが高價なものだつたら何うなさる、千圓や二千圓で買へないものはイクラもわるのだから、充分氣

を附けて貰はねばなりませんよ」邦子の額には皺が寄つて、眼は凄く光つて居る。そこへ、初江が顔を出して「只今歸りました」邦子は、それを見て、「おうお歸りか、大層早かつたね、天王寺の乳母は居所が分りましたか」いふ間に、邦子の額の皺の影もなく消えて了ふ、「四年前に天満の方へ引つ越したとかで、區役所でも手がかりはございませせん、雪のやうな額や、格好の好い鼻頭に、小さな汗の玉を浮かせながら、白襟をキチンと合はせて、白つばい夏帯もキリ、と締めて居る、邦子は、其姿を優しく見て「さうでしたか、まわ、氣永く探すが宜しい、其間に分つて來ませうよ」「奥さま」初江は云ひ憎さうに「私、申し分けのないことを致しました」「何ですわ……」「傘棚へ、お傘を納ひます時、つい過つて奥さまのお傘を落しまして、象牙の柄を折りました」兩手を支いて、おろく聲でいふ。「お蔦、お梅」邦子は噓しく呼び立て、「何故、初江さんの傘を棚へ納つてお與げなさらない」

何御用かと馳せ参じたお蔭、お梅の二人は、一方開け放した隔ての閑際に両手を支いた、「二人とも御存じはないのでございますから、皆、私の無調法なんですから」初江はまた詫る。邦子は初江の方を見て「初江さん、何もお前さんが心配なさることはありません、あれはねね、何うせ傷物だつたのですから、これを機に新らしくなるから反て私の儲りですは、は、は、」

(十八)

脱ぎ捨てし羽織袴を、次の間で女中のお蔭に畳ませながら、主人の彌八郎はセル物の單衣に着替へて、演縮緬の兵古帯をグル／＼と肥れた腹の邊に巻き、「サイダーでも持て来んか」側に居た邦子は手を叩いて、紫檀の机の脇に坐つたまゝ、振り向いて、來合せたお梅に云ひ附ける、彌八郎は机の前の革蒲團の上にドツシリした襦袢を据ゑて、埃及蓑を口に啣へ「京都の紫小

路子爵な、あの方の御嫡子を招待することにしたから、大阪ホテルへ電話をかけて、洋食を五六人前持つて来るやうに云ふのだ」紫小路子爵の若殿が被仰るんですか」邦子は眼を睜つて、「あの立派な男前の子爵の若殿が、何時です……」「今日よ、夕景にはお越しの筈ぢや、二階の大廣間を掃除させて、直藏に土藏の金屏風や軸物など出させて呉れ」お梅はサイダーを盆に載せて持つて来る、邦子は、栓拔で口を抜いて、コップに注ぐ、「若殿はお幾歳位ですか、良人」彌八郎は洋盃に口を附けて「さうぢやな行雄位ぢやらうかな」すると、二十六七なんですわね」云つて、邦子は何と思つたか指を折る。「は、は、は」彌八郎は笑つて「お前は華族様だや夢中になる、縁も好い迷惑よ、阿母さんが、華族さまが好きだと何時までも縁遠くさせられる、尤も、這度はお前の本望が果せるかも知れん、縁のプアイオリンを一つ、お耳に入れやうと思ふから、彼れにも爾う云つて置いて

呉れ」邦子は膝行り出で「あなた、良人、明日になさる譯けには行かないの
 ですか」「何故かの」「緑子にも仕度があらうぢやアありませんか、今から
 では」云ひかけて、「お薦、お薦」と次の間のお薦を呼び「今何時ですか」
 お薦は襖越しに「恰度三時でございます」「三時・四時・五時・六時と、四
 時間しきやないぢやありませんか、お湯やら髪やら……それに着物だつて
 も」「ところが、さう行かぬから仕度がないさうく、まだ忘れていた、初
 江さんにもさう云つて彼女には琴を弾かせ、緑のプアイオリンと合奏させや
 う趣向ぢや、何と、これなら若殿もお氣に入らぬことはあるまい」彌八郎は
 莞爾もので、コップを干す、邦子は空いたコップを見ながら、注がうとはせ
 ず、「今度こそ お眼鏡に適へば好うでございますがね、良人」「さうぢやの
 向うは娶る方、此方ぢ娶られる方ぢやから、覺束第ない次やぢの」云つて、
 手づからサイダーを注ぐ、「緑子も、もう二十二ですからね、他人には二十

と云はせて居ても、實際ばかりは争ふこと出来ませんでね一少し伏し目にな
 る。「ぢやから、云はぬことぢやない、早く片付けて了ひなさい、御題模様
 と娘の歳を老つたのは、買ひ手がなくなるからと口が酸ばくなる程云つたぢ
 やないか、あアして置く間に虫でも附いたらどうするのぢや」「ですから、
 明日に延ばせて下さいと云つてるのぢやありませんか」と、焦躁さうにいふ
 彌八郎は 眼を撫で上げて、「それは出来んな」

(十九)

緑子の部屋では、一閑張の机を中に隔いて、初江と緑が對坐つて居る。緑
 は、机の上に兩腕を支いて、ユニオン調本の二の巻を閉ぢ、其量を見ながら
 「まわ、初江さんの記憶力には驚いてよ熱心も熱心だけれど、僅か二月足ら
 ずの間に、ユニオンの二を終げてよ」と云つて、初江の面を睨め「この順で

行かうものなら、今年一ばいには私が教はらなければならなくなるわ」「わ
 ら、お嬢さま……」云ひかけるを、縁が「そろまたくお嬢さんだなんて
 厭だわねわ」眉を蹙めて笑ふ。「ついで、口へ出るんですもの」と、初江も笑
 つて、改めて「こんなに御本をお願ひしておうるさくはございませんか」縁
 は、本を脇へ直して「家政はもうあなた一人で出来るん、不審がわつたらお
 聞きなさい、要するに實行が出来れば好いんですから、これで今日の學科は
 お了ひにして、些とお咄をしませう」「はア」初江も快く同意して、「わ
 の、お手紙のことは何うなさいまして……」と微聲になる。「あれッ限、
 返事しないの、けれどもまた来てよ、執濃いでせう、這度は場處や時間まで
 書いてゐるの、誰れが行くものですかねわ、見ず知らずの男子の處へ、人を
 馬鹿にして居るわ」「眞個に失敬ですわねわ」「世間にはあんな悪戯家が澤
 山居るんですから眞個に油斷がなりませんよ」縁は俄に思ひ附いた振りで、

「私初江さんに聞きたいことがあつた、今朝天王寺へ行つたでせう、あの野
 村たまとかいふ女ねわ、あの女を探すには何か理由があるでせう、只、阿母
 さんの乳母だつたからといふやうな單純な理由ぢやないでせう」「別に理
 はございませんの」「い、ね」と、縁は頭を振つて「私屹度、行雄さんにも
 關係してると思ふのよ當つたでせう、違つて……」初江は、俯向いて眼を
 瞑つて居る。「當つたでせう」縁は、自分ながら、得意さうに、笑顔を作つ
 て初江を覗き込む。「最初、私が思つたのと一歩一照ちがはない、併し、初
 初さんは幸福よ、彼んな義侠のある、男らしい人はなくつてよ、親類の人を
 褒めちや何んだけれど」初初は、まだ黙つてゐる。「初江さん、そんなに隔
 てを置かなくつても好いわ、二人の中に秘密は無い筈ぢやありませんかもう
 結婚の約束は済んで」初江は机の上に俯伏して、袂で顔を隠して了ふ、
 描いたやうな襟脚がピリ／＼と戦慄いた。縁は、妙に感じながら、頬杖を支

いて驚の羽根の如な新緑の植込、水晶を手繰る様な池の噴水を、昵と噴めて居ると、「線さんや、初江さん」と呼ぶ聲が、廊下の方から足音と共に近よつて柱の蔭から邦子は顯はれた。「もうお稽古は済みましたらう、さあ今日は大變、すよ、と落附かぬ振である。聲を聞いて、初江は顔を上げる。その顔は濡れて居た。「今晚お客さまがあるのだから、二人共お湯へ行つて被來い、そしてお化粧もなさいましよ」といふ母を顔見上げて、「何ですの、阿母さん、お客さまですつて……そして、私たちがお給仕に出なくつちやならないんですか」「さうですとも、お給仕ばかりぢやありません、二人で琴と胡弓の合奏をしますので」「二人で合奏……」「線は眼を瞼つて初江を見ながら、「まあ、厭ねね」初江は濡れた顔を拭き、線を見返へす。

(三十)

二階の大廣間では、これから合奏が始まらうといふ處である、夫人の邦子はお蔭に用があつて、厨の方へ出向いて見たが、一時戦場のやうであつた臺處は、寂寞閑として電燈ばかり青白く輝いて居る。銅壺の前の燭番はお茶を入れて居るし叩土間の白衣の料理人は、炭火の前の空箱に腰をかけて巻蓑を熏らせて居る。お蔭はお給仕に上つて居るのだが、お松お梅は厨に居る筈である、筈であるのに姿が見えない、厠か、それとも、疲れ切つて寝て居るのか、と、邦子は酒蛙酒蛙とした衣摺の音をさせながら、自分で用を果した歩いて居た。弗と、車夫部屋の前を通りかゝると、何やら啼々喋々と饒舌て居る女の聲がする、氣を注げて聞くと、お松も居れば、お梅の聲もする、其れが、お嬢さま、初江さま、と云つたやうな聲で持ち切つて居る邦子は只分

けもなく、二言、三言聞いたが、何時か釣り込まれて、沈と耳を澄ます。二階では合奏が始まつた、一座は。鳴を静めて居るので、女中共の聲は、手に取るやうに聞ゆる、「お松ちゃん。黙つて、黙つて」今始まつた處だね」暫らく黙つて居る、お梅は黄色い聲を出して、「好いわねね」子爵の若殿も、涎を牛のやうに垂れて聞いて御座らう」これは車夫の聲である」涎は、其方へ澤山流れるだらう」「さうさなわ、水蜜桃の方だらうな」「水蜜桃たわ、誰ですよ」「初江さんが水蜜桃で、お嬢さんが香樂だ」「何故だ」「水蜜桃は、皮は薄くても實が多い、ザポテンは皮ばかりで實が小せね」「おは、、、」「おは、、、」「お可笑なことをいふ金さんだよ」「叱ッ、聞ゆるぢやないか、大きな聲を出して」これからまた、小聲になる。「全く、さ、金さんの云ふ通りだよ、お嬢さんは衣物や、お化粧で美しく見ゆるんだけれど、初江さんにお嬢さんの様な振をさせて御覽、それこそお嬢さんなん

ど脚下へも寄り付けはしない」「さうばかりでもないよ、私しや、初江さんは嫌ひさ」「お松ちゃんはお株を奪られたもんだからわ、いふのよ」「お茶だつて、花だつて、私でも母親がお師匠さんだから、初江さんなんぞに、買けつ事はありやしない」「ところが、父親が魚屋で、母親が飯炊、上と來てゐるから助からないんだらう」「たんとお云ひよ、お前さまの御両親は水呑百姓で被在るからねね」「おは、、、おは、、、」「兎に角、俺が子爵さんだつたら、初江さんにお目かけられるね」「金さんが子爵さまだつたら、私がお嬢さまになりますよ」「どうだい、其積りで、諾と云ひねね」「おう、厭だ、仰山な聲を出して」お梅が襖の外へ遁げ出すと、其處に邦子が立つて居たお梅は火の出る程、顔を眞紅にして、俯伏して分もなしと何度となく頭を下る。邦子は何にも云はずに、悄けて、とぼくと二階へ上る、二階の合奏が今果てたところで、雨のやうに拍手の音が響き渡る。塵は

眠から冷めたやうに、活動し始めた。

(三十一)

「昨夜は、多勢罷出まして、いかう、御馳走に相成りました、主人からも宜敷く申傳へるやうにどのことで、拙者若君に代りまして、御禮に罷越してござります拙者も、いかう、酩酊致して、いや、はや飛んだ不法法をお目につけ汗背の至りにござります」殿しい羽織袴の扮装で、子爵紫小路の家令は、應接間の中央に陣取つて、四角四面になつて居る。「何ういたしまして、何の風情もござりませんで、若様にも嘘かし御迷惑で被居いたしましたでせう」これは不斷着の上へ羽織を引つけて、良人の代りに應對に出た村山家の夫人邦子である「いや、却々若様も近來にない清遊と興せられてござります、中にも合奏は至極お耳を曳かせられたと見えて、御歸館後も其

事ばかりで、持ち切のやうでござるよ」云ひながら扇子をバチ／＼はせる「おほ、い、まわさうで被居いたしましたか、わんなんのももお氣に召しまして、何よりお嬉しう存じます」云つて、邦子は俄に手を叩き、「お松や、プランかう井スキーかを持つてお來で」「どうぞ、お介ひ下さるな」「それからね、水菓子の何かあるだらう持つてお來でなさい」お松は関の外から、「はい」と畏つて引ッ込んだ。「どうぞ、お樂に遊ばして」と鳥渡會釋をして、また、「おほ、い、い」と、思ひ出したやうに笑ひ「合奏が若様のお氣に召してござりますか、まわ、さうでござりましたか」邦子は半帕を口に當てる。「これまでにない清遊と、仰せでござります」云つて、家令は澁色の顔に皺を集める、「まわ、さうでござりますか、おほ、い、い、邦子は上機嫌である、そこへ、口を抜いたばかりのウ井スキーと、林檎を盛た硝子鉢とを盆に載せて、お松が恭しく差し出した。「好いから、お退りなさい」と

(二十二)

邦子は、應接間に坐つたま、沈と考へ込んで居る。家命を見送る勇氣も出なかつたのか、お松に客を送らせて、自分は矢張元の座に長い息を吐くのである。「奥さま」。そこへ初江が、襖を開けて顔を覗ける。「只今緑さんとお茶のお稽古を致しますから、お客さまに被成つて下さるやうのお傳言でございます。云つて両手を閑際に支く。邦子は黙つて居る。初江はまた「緑さんとお茶のお稽古でございますから……」。「緑さんとは何です邦子の眼は輝いて居る。初江は事の意外に口も利けなかつたが「はい」と頭を垂れる。「緑は私の娘、です。よ貴女の爲めには主人ではありませんか。主人を捕へて緑さんとは何んです。「はい」「はいでは分りません」「何うぞ、御免遊ばして……」。「勉強に被成つたのかは知らないが、宅ぢや貴

女から下宿料の一錢でも貰つたことはありませんよ、して見れば厄介者ぢやありませんか、厄介者で居て緑さんとは何たる言ひ分です、一體、貴女は生意氣です、お琴がお上手か知らないが、緑は胡弓の名手と言はれて、學校でも褒状を貰つたものです。邦子は脇を向いて鼻で笑ひ、「較べものになつて溜るものか」「何うぞ御勸忍遊ばして……」。「何時までも邦子が黙つて居るので、初江は怖々と襖を閉めにかゝると、「初江さん」光つた眼は、また此方向き、「何故。此處を片附けなさらぬ、あなたの眼には此お鉢や、鱈が見えませんか」「はい」初江はお客の跡始末にかかる、一何です。阿母さん大きな聲を出して云ひ「緑が入つて来た。邦子は顔を反方向ける。「初江さん」緑は初江の肩に手をかけて「氣にかけないで下さいよ。阿母さんは彼わいふ性質の人なんだから」初江は袖口で眼を押さへ「てい、お私が悪いのでございます。緑は、お盆の物を運んで行く初江の後姿を見送つて、

「爲やうと云つたつて、あんなことは初江さんに、ツイござせたことのない
 僻に今日は阿母さん何うかして被居るわねね」云つて、母親の不機嫌な顔
 を見る、邦子は、娘の顔を見て「縁さん、あなたは何故、初江さんに、縁さ
 んなんて呼ばせるんです。お前さんと初江とは身分が違うちやないか、無教
 育者と同様に見られては、阿母さんの育て効がありません」「まわ、色んな
 ことを被仰るわ、阿母さんは今日は餘程何うかして被居るわ、母の側に坐
 つて少し笑ふ。邦子は、左手で兩眼を襲ひ、「これも皆、子が可愛いからで
 す、お前さんに出世がさせたいからですよ、涙を落して居る」縁は淋しい笑
 顔になつて、「さうなんでせう、屹度さうだらうと思つた、私しや、丁と前
 から分つてゐるんだから」と手の甲で膝を叩き、「私だつて邦子だつたら
 こんな家の娘なんぞ娶ひはしないわ、それに阿母さんは華族華族つて、華族
 さんが何處が好くつて」縁は縁側へ出て、柱の側に立ちながら、「垣根の薔

薇の、好く咲いたこと」

(二十三)

「三越から、お誂物が参りました」お松は、何やら提げて来る。邦子は肯
 首いて「もう、丁稚は歸りましたか」「はい、歸りましてでございますが、
 御用がございましたら呼ますでございます」云つてお松は邦子の氣色を窺ふ
 「いや、宜しい、傘も持て來ましたか」「はい、奥さまが先日お來で下さい
 まして、お注文遊ばしました品でございますと申して、これを置いて歸りま
 した」お松は、燃黄の風呂敷包に、牙彫の蝙蝠傘を添ひて來す、邦子は機嫌
 よく、「蔦にも、梅にも、來るやうに云つて下さい、お前もですよ、それか
 ら縁にも被來いつて」「はい」お松が畏つて引き退ると、引きちがひに
 初江が出て來て、「奥さま、お手紙が参りました」邦子は、包みを解いて、

四五反もあつる浴衣地の柄を見て居たが、初江の顔を見ると直ぐに眉を蹙めて黙つて、差し出す封書を引ッ奪る。「藤井さんから、お嬢さまにも参りました」
 「誰から来たつて好いちやありませんか、好く要ぬことを被仰る方です
 ねわ。初江は睨まれて、差俯向く。「はい、御用でございますか」お松を
 始め、三人の女中が差し控へる、邦子は直ぐに眉を延ばしてこれを、お前さん方に一反宛與げやう、云つて夫々に渡し。「これは、お三に與けて下さいよ」と、別に一反渡す、三人の女中は額を関に摺り附けて、お禮の百萬遍も唱へて往く、往き際に、初江を横目で見て、これ見たかと云ふ舉動をして見せたのはお松であつた。子初は、立つ機を失くして、居場に苦しんでゐる。
 「初江さん、お前さんのお隆で、傘が新らしくなりました」云つて、邦子は深張の蝙蝠傘を開いて見る、濛い色合で、唐草の浮模様がある。初江は、生汗をチリ〜と沸かせる、そこへ縁がやつて来た、片手に手紙を握つて、

関の側に立ちながら、浮何故かかぬ色で、「阿母さん、行雄さんは大阪へ轉勤になつたんだつてね、明後日は歸つて来ますよ」邦子は、それにも生返事をして、「縁さん」と、調子高に呼び「お前さんにはこれが好いでせう」傘を疊んで、明石縮の粹な浴衣地を見せる。柄も好いし、第一、色合が好いでせう」云つて、自分で惚々と見てゐる。這度は縁の方が生返事をする、「さうねわ」邦子が、それを肩にかけたり遠目に見たりする間に、縁は初江を見下して、「初江さんに宜しくと書いてあつてよ、そして呉々も初江さんの身の上を頼むつて、初江さんにも手紙が来たでせう」「はア」初江の聲は低かつた。「行雄さんは……、初江さんにも寄越してた僻に」縁は何やら思ひ入れをする。「縁さん」子邦は呼んで「これは氣に入りますか、入らなげや直藏所のお花に與ります」縁は初江の身の周圍を見て、「初江さんは可が當つて……」初江は、消ゆる入りたい氣で「私は澤山でございます」

云ひながら、右手の指頭で睫毛を拭くのである。

(二十四)

座敷の方で柱時計が十二時を打つ、初江は、まだ、床の中で英書を読んでゐる其眼は泣き腫れて居た。枕許の洋燈は、地虫のやうにちぢと鳴いて、森とした中に水の音がする、初江は頁の間から口の切れた封書を取り出して本の上で開いて見る。お手紙は一月前に拜見しましたが、筆不精の爲めに今日まで延引しました何も彼も好い事づくめなさうで、僕も大に安心しました、此上とも御勉強が第一です。僕も今度第四師團へ轉任を命ぜられて今日明日の内には廣島を出立します、二三日中にはお目にかゝれませう今から楽しんで居ます、内田君はいよゝ横濱へ就任しました、時分柄御大事に、體を大事にすること、勉強を怠らぬ事とが、亡母さんへの孝行です今日

お暇乞ひ旁々貴女の事を報告の爲めに御母堂のお墓へ参詣して來ました初江さんに宜しくと云つて居られましたよ。讀む間に、また涙が新に湧くのである。「私が内田に嫌はれないで、所帯でも持つてゐたら、阿母さんもお墓の下で何んなにか安心して下さらうものを、私も今日のやうな、耻かしい、悲しい目を見なくても済むものを」と考へると、内田が分もなく怒めしくなるけれど其れが直ぐに、「お前に、教育がないから嫌はれたのではないか」とあたまなかになにの叫ぶやうに思はれる。初江は、直ぐに其れに同意して内田のことは忘れて了つた、手紙を搔いのけて英書に眼を晒す、少時すると、また藤井の俠氣なことが嬉しく思はれ、奥さまのことが氣にかゝる。「私は何故、奥さまのお機嫌を損するやうになつたのか知ら」彼れか、是れかと考へて見る、何うも其れらしい原因が思ひ附かぬ。「内田が私を嫌つたのも、無教育といふばかりではあるまい、私は人に嫌はれる性分なのだらう」と、

思ふと、悲しくなつて書の文字が暈て見に出す。腹の中では、「せめて縁さ
 んだけには、嫌はれないやうにしなればならぬ」と思ふ。弗と氣が附いて
 見ると本は一つ處ばかり開いてあつて何を讀んでゐたか薩張分らない、顔の
 皮は可笑く引張られて、鼻筋に鼻が詰つて居たもう。「癪ませう」と、本を
 閉ぢて、立ち上る。着古の子ルの掻卷に、緋の腰帶を前結びにした影が、
 茫乎と後ろの襖に大きく映る。初江は、早く藤井に逢ひたいやうな心もす
 る。逢うたからとて打ち開けた咄の出来るでもなければ、何うといふ分でも
 ない、只、懐しい思ひがする、爾うした想をさせながら廊下傳ひに廁へ行つ
 て何心なく明窓から庭を覗いて見た。植込も築山も眠つたやうに洗とし
 て、お池の噴水が時を得顔に騒いで居る。「緑さんは」と、思つて、乾淨房
 の方を見ると、雨戸が青葉越しに透いて、星明にも仄白く見ゆる。と、何
 やら芝生を踏むやうな足音がして、誰やら密々と咄聲がする。初江は耳を

澄ませたが、石を叩く水の音に消されて其れ切聞はなくなつた。「はて誰れ
 であらう、此夜更に」と思ひながら、昵と瞳を据ゑて見れば、黒い影が二つ
 離座敷の軒下で一つ一つに別れて、一つは慥に雨戸の中へ入つた「賊か、附
 け火か……、強盗ではあるまいか」初江は斯う思つて、脊筋へ氷を浴びた
 やうに慄然として、がた／＼と體を顫はせて居る。此に斯うして居るも怖い
 と云つて自分の部屋へ歸るには廊下の間が怖ない、少時は息さへ殺して、體
 を固く萎縮せて居た。

(二十五)

黒い影が雨戸の中へ入つてから、長いこと初江は、廁の窓際に立つて居た
 耳を濟まし、氣を注げて居ても、それから何んの音もせぬので、若し縁さ
 んではないかと、思ふと何んもなく氣丈夫な心がするので、初江は抜き足さ

し足自分の部屋へ戻つて夜着の中へ入つたが、目が冴れて寢附かれぬ、その間にツイウトくとなつた。緑の部屋の方で消魂しい叫び聲がする。初江は跳ね起きて、離座敷の方へ駈け附けると、部屋の障子が一枚倒れて中に、緑が血に染んで、引く息ばかりになつて居る。「み、緑さん」初江は我れを忘れて抱へつく、緑は土のやうに蒼礎めた顔を上げて、切つた齒の隙から、「初江さん救つて下さい」といふ、初江はオロ／＼して「氣を確乎お持ちなさい」と耳元で叫ぶ恰度此時、廊下をドタバタと驅け来る足音がして「ひ、人殺し」と叫びながら、此室へ飛び込んだものがある、初江はハツとして眼を其方へ向けた。「助けて、助けて」喚き／＼、部屋を狂ひ廻はるのは邦子である。初江は緑を抱へながら「奥さま……」。「おう、初江さん、助けて下さい」邦子は血に染つて紅くなつて居る。初江は二人の手負ひを、何うすることも出来ず、只、氣ばかり焦々させて居ると、「此方へ逃がらば

つたな」怖ろしい聲が間近に聞えて、足音も荒々しく入つて来たのは、鴨居に遠きさうな大男で、頭から黒い布をスツボリと被つて、眼ばかり、ギロ／＼、光らせながら右手に抜刀を晃々させる。「さア来い」男は土足で邦子を蹴飛ばして、長い刀を振り上げる、「助けて下さい」云つて、邦子は廊下へ逃げ出す後ろから、男は一ト太刀浴びせやうとする、初江は矢庭に大男の腰に武者振ついで、「た、助けて上げて下さい」「貴様も、殺して欲しいかい云ひさま、腰をグツと捻つて、初江を土足の下に敷くと、男は俯いて、面を覗き、わはや刀の尖端を初江の咽喉元へ、刺し貫かうとする、其刹那、慌しい靴音勇ましい劍の響がして、藤井中尉が廊下に轟乎と立ち跨がる、初江は一ト目見て、「ふ、藤井さん」覺えず料んで、我れと我が聲に驚いて目が覚める。初江は蒲團の中で、汗びつしよりになつて居る怖い／＼と思ひながらウト／＼して居たからであらう「わ、可怖い夢を見た」。それからまた

目が冴いて寝苦しく幾度も寝がへりを打つた。翌朝、初江は緑の部屋を訪ねて見る日は、高く棟に昇つて、臺處ではお晝の仕度に急がしいのに、緑は他愛もなく眠つて居る。「お嬢さま」いふ聲に、緑はぱちりと眠い目を開けて、「初江さん……、もう何時……」。「もう十時過ぎよ、何處かお悪いんではございませんか」「い、い、い」云つて、欠伸する。枕元の有明洋燈は油が盡たかして、薄暗い室に温氣が籠つて居る。雨戸はまだ閉ぢたまゝで「緑さん、何處か悪いのですか」と邦子まで来て廊下から顔を覗ける。昨夜の夢のやうに氣色は微塵もなく枕頭の初江を見た眼は、此頃、憎々しい、光が宿つて居る。

(二十六)

女中部屋でお松はお化粧をして居る。木匡の附いた鏡を針差に立てかけ、

脂肪質の多い、太つた膚を見せて、兩掌で白粉を塗つて居たが、其手を濡手で拭いて、猪鬃を延べて、鼻頭の面胞を絞りにかゝる。食指と親指で鼻を頭を壓附けるので丸い團子鼻が扁たく尖つて、鏡へ可笑い顔が映る、それでもお松は一生懸命である。沈と、根よく押して居ると、蛆のやうな脂肪が、ぶつツと飛出して、水氣のやうな脂と一處に鏡面を汚すのであつた。先刻から、私と拔足で寄つて来て、面を長くして見て居たお梅は、ぶツと吹き出し「お松ちゃん、おめかしだね」お松は、眞紅になつて鼻を振り向けて「まわ、お梅さん、吃驚するぢやないかね」云つて手早く指頭で鏡の胞を拭く。「藤井さんがお歸んなすつたもんだから、お松ちゃんの……」お梅は、薄氣味悪い笑ひをする、「わんな事を、人が悪いわ」云ひ、濡手拭で顔を叩いてゐる。「さうなんだよ、吃度、でなげや、何もニキビなんだ、鏡へ飛ばさなくつたつて好いわね」。「人を、御戯談もんですよ」「澤山

おめかしなさいまし、お嬢さんといふ敵があるから、お前さんも安心能きな
 いわねぬ」「どうも色々憚りさま」とお松は髪を梳きにかゝる。「初江さ
 んの氣のあつたことは、此間の寢言だつて分つてるし」「鳥渡、鳥渡、お
 梅さんお、松は櫛の運びを止めて、「寢言ツて、何んなこと」「おや、お梅
 は呆れた顔をして「お前さん知らないのかい」「あア」お松は氣になりさう
 な眼を睜る」「一昨日の夜さ、藤井さん、逢たうでございましたわ」とお梅は
 假聲までつかつて、「斯うだらうぢやないか、さうと聞いて見ると、藤井さ
 んの添書だつて、二人の中に、甘く狂言が仕組まれてゐるのかも知れないよ
 「そうかいお梅さん、そ、それは本當だらうねぬ」お松は、目の色まで變て
 居る。「誰が嘘なんぞ吐くものか、お萬さん、儘に聞いたと云つてるよ」お
 松は櫛をベキ／＼と折つて、針差へ打ち附ける。「何うしたのさお松ちゃん
 「は、腹が立つよ」と、お梅の方へ膝を向ける。「だから、云はないこつち

やない、イクラ思つたつて鮑ぢや仕様無いんだもの」「く、口惜しいよう」
 お松は齒をギリ／＼云はせて、お梅の膝に獅噛み附く、お梅は振り離して、
 立ち上り、「おう痛」お松を睨め下すお梅の眼は、眞剣に怒つて居る「酷い
 人だねぬ」お松は、見上げて「だつて、口惜しいぢやないか」「私の知つた
 事ぢやあるまいし」お梅は憤々して、帚と采配を取り上げ、態と聞ぬがしに
 「これから、藤井さんの、お部屋のお掃除に上りませう」

(二十七)

「まあ、樂にするが好い」「二階の大廣間の縁側近くへ席を構へて片手にピ
 ルのコツプを持ちながら、斯う云つたのは彌八郎である。「ぢや失敬します
 中形の浴衣の裾を巻繰つて、彌八郎と同じく胡座を掻いたのは藤井行雄。
 「夏の暮は、また格別ですれ」云つて、半袖で口を拭き「月があると、譯は

ないが」「さう、注文通りには行かんよ」彌八郎は笑つて「注文と云へば、何か持つて来さうなものだな、何んば、伯父甥の差向ひでも、梨で放逐しは酷いちやないか、は、は」「だから、持つて来てますわ」優しい聲が襖の隙からして、縁が皿を運んで来る。「や、聞いたか、彌八郎は、禿げか、つた頭に手を置いて、阿母さんには内緒だぞ」「阿母さんは、今お風呂です、私が御對手してよ」云ひく、サラダと、ピフテキを二枚宛配る。「や、これは好い、お前には無しか、ちやア之れでも喰れ」と彌八郎はピフテキ皿を縁の前に押し遣り「お手料理は格別ちや」「私は好いの、後からオムレツが出来るとよ」云つて行雄に向ひ、「好いわね、夏の夕景色は……、行雄さん、廣島と何方が好くつて……」「さうだなア景色は廣島の方が好いが懐しいことは此方だね」「初江さんが被居るからでせう……」縁は水筒扇で口許を隠して、チラと横目を使ふ、行雄は耳に入らなかつたか、緩容

とした形で、目も遙な青い水田や、暮色に微れた生駒山を見渡して居る。冷しい風が徐々と吹き込む。「時に行雄」彌八郎は赤い顔の汗を拭いて「お前も、ぼつ、女房が欲しいのう」行雄は、片々と飛ぶ蝙蝠から、眼を放して「妻ですか」縁は、行雄のコップにビールを注いで居る。「さうよ。初江さんを貰つちや何うちや彼れは却々出来が好いが」縁の眼は、電のやうに父へ向いたが、不安の色目は直ぐに行雄を盗み見るのであつた。行雄は、ホークを口から離して、「彼女は妻に出来ん事情があるんです」彌八郎は浴衣の胸を寛げて「それはまた、何でちや……」胸毛を撫で、居る「理由は云へません縁は、密と、安心の息を吐いた。「それなら、此娘を貰うて呉れてはとうちや」と、頤で縁を指す、縁は明石の袂で、父親を軽く打つて、「厭なお父さん」云つて脇を向く、顔はほんのりと熱みて居た。「さうですわね、まわ考へて置ませう、僕、渡邊子爵を氣取つて、一生無妻で通さうかと

も思つてゐるんですが、「無妻はそれやア好かん、女房を娶つて、とんく子を生まん」と、第一、お前の家が胤切れになるぢやないか。「そんなこと云つてちや、軍人にはなれませんか」「戦争で死ぬのは仕方がない、君國の爲めぢやが、女房を持たずに家の血統を絶やすのは、身勝手ぢやから、祖先へ對しても不孝に當るよ」彌八郎は眞面目になるので、行雄は聲高に笑つて、「まわ、考へて置ませう、歸る勿々、そんな重大問題を持ち込まれちや僕も面喰つて了ひます」「いや、大きに其邊もゐる、こいつは私が謝つた」

緑は、何と思つたか「行雄さん」と、行雄を此方へ向かせて、「初江さんも獨身でせう、姉さんも兄さんもないのね」行雄が肯首くのを見ると、緑は、事もなさそうに襟筋を寛げて、「まア、涼しい風だこと」

(二十八)

丸窓の外、芭蕉の葉が動いて、軒の風鈴がチリン／＼と鳴る、それを、見るでもなく、聞くでもなく、只、机に兩手を置いて茫乎考へて居るのは緑である。父や、行雄に勧められて、コップへ半分ばかり飲んだビールに酔つて、頭をワク／＼させながら、何やら思ひに沈んで居る。「お嬢さま、貴女何を考へて被仰て……」云ひ／＼入つて來たのは初江である。「おや、初江さん」と、緑は振り向いて「何時歸つて……」「先刻歸りましたの」

机の側の、ランプに向いて座る。「乳母やは居て……」「初江は頭を振り「居ませんのよ、何う手を廻はしても分りませんの、私、屹度死んだんぢやないかと思ひますわ、云つて、眼垂れる。「正可」と、緑は無難作に云つて昵と初江の薄化粧を見て居たが「おう、さう」と思ひ出したやうに、「行雄さんが歸つてよ、もう逢つて……」「お目にかゝりました」「それで、お化粧してるのね」妬ましいやうに、初江を睨めて微笑む。「あら、あんな

ことを」初江は、俯き加減に顔を反向ける其顔は赤くなつてゐた。「それは冗談よ」縁は打ち消して、改まつた調子で、初江さん、初江も、面を冷せて振り向く「はアー」「私、困つたことが出来てよ」「何うなすつて……、さう被仰れば、何處かお顔色が悪くツてよ」「心配さうに眼許を曇める。」「私、初江さんを姉妹のつもりで咄すの大變な秘密よ」「何うぞ、お互に秘密はない筈ぢやございませんか」「改めて姉妹になりませう、私が年上だから姉さんよ、初江さんは妹」云つて、初江の手を取り「これが誓の印よ」と、力を籠めて握るのであつた。初江は初心らしく「何だか濟まないやうですわ」と、俯伏く、「誰に……」云ひながら、廂髪頭の頭に手を當て、淡い藍色の、西洋花の簪を抜いて、「初江さん、彼方をお向き」初江は云はれるまゝに、烏羽色の三巻を灯に向けて見せる。縁は、右手の造花を、脇挿に簪してやり、髻留の代りに挿したミルク色のリボンを、初江の頭から抜いて、

「これは、私が貰つてよ、誓の記念だわ」云ひく、自分の頭に挿す。初江はちよいと、頭に觸つて見た「これを私に下さるの……」。「交換だわ」初江は、縁と顔を見合つて「これぢやあなたが損よ」「好くつてよ、何うせ妹なんだもの」「では、お姉さま」二人は莞爾する、初江は直ぐ眞顔になつて「秘密つて何んなこと、……妹に云へないことはないでせう」一大した秘密よ、私、懺悔するわ」縁の顔は、蒼褪めて来る。「實わね、初江さん、わたし、今晚の十一時頃お庭の柴折門の側の、長椅子の處で、某る男子と出會ふ約束がしてあるの、それを私は墮落だと思つて懺悔してるのよ、何んとかして救つて呉れること出来なくて……」初江は眼を睜つて「そんな約束をして被居るの、男子の方と……」。「だから、懺悔してるわ」初江は呆れて、物も云はずに居る。「それが、會はなければ、此迄まで来るのですもの、縁は直ぐに「いね、来るツて、いふ約束ですもの」と、云ひ變へる、初江

は、長い息を吐いて、何うしても逢はなげやならないんですね」「さうなのよ、私、初枝さんに代つて逢つて貰ひたいと思ふの、そして私の後悔してゐることを、戀の冷めてることを、その男子に傳へて欲しいの」初枝は、眼を閉つて考へる、「厭なら好のいよ、私、頼まないから、云つて、縁は昂然としてゐる。初枝は、無言で考へる。「厭なら、好うござんすよ、おれさまだから」云つて立ちかける、初江は其袖を取つて、「屹度、私が引き受けて何とかしてお上げ申しますわ」初江の眼には、悲しい色が浮いて居た。

(二十九)

「若様」「うむ」「あなた、お楽しみでございませぬ」「何故……」「何故つて、初江さんのやうな美しい方と……」お松は二階の椽側に立つて、簾垂を巻きながら云ふ。「初江さんと……」行雄は八疊の間の中央に、大の

字形に仰向いて、ピールで熱した顔を、ランプの火に晒しながら、好い氣持にウト／＼して居る。「何時、御夫婦におなり遊ばすんでございませぬ、お家をお持ち遊ばしたら、せめて私をお三にでもお使ひ下さいませ、欄干を脊中にして、お松はそして躡むのであつた。「うむ」「お三にして下さいませか、屹度でございませぬよ、若様のお側でしたら、私、何んなことでも致しませぬ、云ひながら、お松は嬌態をして見せる、行雄はうと／＼眠りかけた。お松は、一向、張合のない顔をして、始終帯を氣にして、脊中のお太鼓を撫でて見たり、指頭で兩の眉毛を摩つて見たりして居る。「若様、若様」と、お松は、行雄を眠らせまいと、絶えず聲をかけるのであつた。「廣島は、面白いとこでございませぬか」「うむ」「宮島へ、被行いましたか、「うむ」「奈良のやうに、鹿が居りますつてね、本當でございませぬか、嘘でございませぬか」「うむ」「若様、若様」お松は灯の側へ寄つて「お風邪を召しますよ

遣度は返事がない、それでもお松は根よく、「明日は、師團へ被行いますのでございませう……」

「何ッ」行雄は、ぱつちり目を明け「師團が何うした……」お松は右手を、大きな口頭へ持つて来て、お壺口をして笑ふ。

行雄は、お松を下から見上げて、お前、女中を廢業して、相撲取になつたら何うだ。「たんと被仰いませ、何うせ私は、お多福でございます、初江さんのやうに、琴も弾けませんし、お茶も、花も」

「おい〜」行雄は起き直つて「初江さんと伯母さんの仲は好いだらうね……」

「どうですかね」

「可けない方かい……」

「好いこともございませぬね、この間面白

いことがございましたよ、皆で奥様からお浴衣を頂戴いたしますのに、初江さんだけ何んの御沙汰もないんですものあの時だけは心底可哀想と思ひました」

「何故かね、何故、初江さんに下さらんのかね」

「それが、初江さんの前で、お蔭さんもお梅さんもお頂戴したのでございませう、思ひ出しても冷汗

が出るやうでございます奥さまはね若様、私に一等好いのを下さいました、奥さまは大層、私がお氣に召して一も松、二も松、お松が三人居たつて追付くことぢやございませぬの」

「初江さんの前で……」

「行雄は腕を拱んで小首を傾げる。」「若様、何をお考へ遊ばす……」

「お松は、怪訝な顔をする、行雄は飛拍子に、」「さうか」と誰にいふのでもなく云つて大きく欠伸をしな

がら、「とれ、庭でも散歩するかな」

「お庭へは螢がチヨク〜、迷ひ込ん

で参りますよ、狩りに参りませうか」

「いや、僕は、庭へ行くんぢやない」

「何處へ被行るのでございます……」

「何處へ行つても好いちやないか

白い眼で睨れて、お松は嫌な顔をした。

(三十)

薄暗い、庭園の築山を、トボ〜と昇つて居る仄白い浴衣の後ろ姿は、初

江である。何處から迷つて来たか、螢が一つ、青白い光を照しながら、初江の頭の上をフワ／＼と飛んで、池の方へ飛んでいつたそれを賜と振り向いて、初江は茫然佇立む。「もう、四年になるわね」と、獨り云つて、我れを忘れて立つて居ると、築山の向う側から悠々と上つて来る男がある。男は、紙巻の煙を吹きながら歩み寄つて、「初江さん、何を考へて居ますの」初江は我れに歸つて、「おう、行雄さま」懐しい聲である。「また、伯母に苛められたね」いふ行雄の顔を、初江は見上げもやらずに、半袖で唾を拭いて、「螢を見てみましたの」「螢を見るのに、泣く分はなからう」云つて初江を可憐く見て居たが「まわ、此方へ被來い」と、自分が先へ亭へ入つて、陶器の腰掛に腰を卸す、初江も後から尾いて入つて、悄悄と腰を着ける。「何うだね、初江さん、此家も大分厭になつたらう」「何故でございますか……行雄を上目に見る。「あれで伯母も、悪い人間ぢやないんだよ」「何故、そ

んなことを被仰るのです……私を伯母さんは大層可愛がつて下さるんですよ……」云つて、行雄に了られぬやうに嘘を拭ふ。「あなたのお手紙では、何も彼も好い事づくめだから、僕も、大に安心して居たんだが……」「眞實なんですもの、旦那さまも奥さまも……、お嬢さまは申すまでもなく……」「お嬢さまとは、緑さんのことかね」行雄は聞き替めて、旦那さま、奥さまといふと、何だか、召使のやうだね、矢張、小父さん小母さんと云つた方が好いがね、それに緑のことをお嬢さまといふ法はない、緑さんで澤山だ、初江さんは何故そんな敬語を使ふのかね」「緑さんでは、失禮のやうですもの」「伯母が爾う云はせるんだらう虚榮心の強い女だからね、獨語のやうに云つて、「初江さん」と、行雄は横顔を星明に透して見ながら、「あなた大分瘦せたね」と「夏になるといつる瘦ます」と、淋しい笑を浮べる。「いや、行雄は頭を振つて、「夏瘦ではない、初江さん、あなた

は獨りで苦しんでるのでせう」「い、ね」「苦痛があれは、僕に被仰い、以來は僕がその苦痛の半分を背負つて與げやう、健康を害しては、取り返しが附かない」「行雄さま」初江は半帕で眼を覆うて、「御親切は永久も忘れません……」後は口が利けなくなつた。行雄も、掌で目を壓へて「乳母やの居處も分らないさうだね、せめて乳母やが居てくれると、あなたも氣丈夫なんだかね」二人共、少時無言、噴水も、嘔泣の音がする。行雄は、涙を拂つて、信となり。「行雄に息の通つて居る間は、決してあなたを、孤獨に泣かす事はしないから、心を大きく持つてお在なさい、誰が何んと云つても氣にかけちや好けない、好いかね、ぐよく思ふのが一番好けないから、僕には姉も妹もないのだから、失禮だが初江さんを肉身の妹のやうに思つてゐる、あなたも僕を實の兄と思つて呉れなけりや可かんよ」云ふ顔に眞と愛が溢れて居る。初江は潜々と泣いて居るのである。「僕のやうな兄ぢや厭か

ね」行雄は微に笑を見せて、初江は俯向いて、只、泣くのである。此光景を、亭の外から頭を長くして、覗き見をしたのはお松であつた。

(三十一)

「お嬢さま、お嬢さま、私、まわ、大變なところを見附けて参りました」お松は、閑際に膝を支いて、猪首を延べて微聲にいふ。縁は首だけ此方へ向けて、身體は机に凭れて居る。「何を……」「今、お庭の亭で、お嬢さま若様と初江さんが……」「ね、」縁は耳を引つ立て、「行雄さんと初江さんが……」縁は返して云つたが、縁で招いて「此方へお入り」お松は得たりと立つて、廊下の彼方此方に立ち聞く人の居ないかを見定め、縁の側に石臼のやうな聲を据ゑる。「行雄さんと初江さんが、何うかして……」縁も微聲で聞く。「まわ、驚くぢやございませんか、初江さんがね、お嬢さま」

云ひかけたが、直ぐに出直して、「斯うなんでございますよ、若様が散歩にお出なさいますから、私も……」いねその、遠くへお出でになつてはねわ、旦那さまも奥さまも御心配遊ばしますからお友達のお宅へでもお行で遊ばすのでしたら、何處其處の何の誰の宅へ行くと、詳く被仰つて戴かないと何時、何ういふ御用のないものとも限りませんから、その時になつてトチメン棒を踏んでも、駄目でございますから、其邊をお聞き申しませうと存じましてねわ、お嬢さま「縁は焦燥しさうに「そんなことは、何うでも好いよ、行雄さんと初江さんが、何うしたのさ……」」「まわ、お聞き遊ばせ」と、お松は右手で空を押へるやうに制めて、順を立て、お咄をいたしませんでは筋道が分りませんよ」「それから何うしたの」「それから、私、お庭の内を方々お探し申しましたのでございますよ、お裏門の方から、桶込の方、それから、觀月庵のでございますところは、それでも一向、お姿が見えませんから

よんどころなく築山の下まで戻りかけますと、何だか人の泣き聲が致しますんでございますの、はて不思議なと思ひく、亭の外から覗いて見ますとねわお嬢さま、何うでございませう、お松は、縁の眞向へ膝行り出て「假りにわなたを若さまと致しますとね、私は初江さんでございませよ、斯ういふ風に」と、お松は縁の膝に凭れかゝつて、シクシクと泣いてるぢやございませんか起き直つて「若様はまた若様で」と両手で抱へる手附をして、「何とか、彼とか、嬉しがらせを被仰つてお居でなさるぢやございませんか、私、それを一ト目見ますと、腹が立つて、腹が立つて、云ひく、シクシクと泣き出した。「さう、……」縁は聞く間に、目許を色々に變へたが、最後に茫乎となつて、ランプの花笠ばかり瞻めて居る。「行雄さんと、初江さんが……」まわ、さう……」云つて縁は態どらしい笑貌をする。「居候の僻に、失禮ぢやございませんか、何とか云つてお遣り遊ばせな」厚化粧したお松の顔は

涙で、一面に斑が出来てゐる。縁は、それに取り合はず、振り返つて本棚の上の置時計を見上げつ、金の髪に、銀の膚を見せた天使は、十時に五分前の時計を抱へて居る。縁は、安堵したやうに立ち上つて「可笑な松だよ」と今度は腹から笑止らしく笑つて、「好いちやわないか、好いた同士が好いたことをして居るんだから、何も泣くことはないぢやないか、まわ、をかした松だよ。縁は、化粧部屋へ行くのである。

(三十二)

雨戸を私と開けて、後ろに氣を置きながら、お庭へ片足を下したのは初江である。夜は森と更けて、噴水の水の音ばかり高く聞ゆる、初江は下駄を片手に持ち、片手に雨戸の端を持つて、兩の足を庭に下した時、障子の開く音が彼方として、廊下傳ひに近寄る足音がする。初江はハツとして、椽側へ這

ひ上り、雨戸を私と締めかける間に、人の歩音は礎と止むで、「何誰ですかそこに立つてゐるのは……」いふ聲はお松である。「わ、わたしでございますいませ」云つて、開いた雨戸の側に忸怩して居る。「私とは誰です……」「初江です」「まわ、初江さんですか、雨戸を開けて立つてゐるのは」と、態と聲を張つて「帯まで締めて、此遅いのに、何處へ被行るのですか、お庭に誰か待つて居る人でもゐるのですか、おやく下駄まで用意をして、まわ、呆れかへるよ、お松は、家の内へ、響くばかりの聲でいふ。初江は、消ぬも入りたい思いをしながら「どうぞ、そんな大きな聲をなさないで、只、星明を見て居ればかりなんですから」拜まぬばかりに、小聲でいふ。「聲の大きいのは、私の持ち前ですからね」いよく高聲になつて「星明を御覽なさるのに、下駄が要るんですか、まわ、舶來の別嬪さんは、違つたもんですね」いに下駄が要るんですか、まわ、舶來の別嬪さんは、違つたもんですね

ふ聲を聞き附けて、細帯の猥な振をした女中が二人、眠さうな眼をしながら片手にランプまで提げてやつて来る。「何うしたのさ、お松ちゃん」「何うしたも、斯うしたもないぢやないかね、これを御覽よ、これを」と、邪慳にも、初江の抱いた下駄を抜き取つて、「これを、御覽、下駄だらう、これを持つてさ、お庭へ忍びかけた處を、私に見附けられたものだから、星明を見て居ましたとさ、ハ、ハ、ハ、星明が聞いて呆れるよ、お松ちゃんは何んでも見附ける人だねわ」「仕方がないぢやないか、私や其都度用事があつたんだから、今もお廁へ行かうと思つてる處へ雨戸の開く音がしたからそれで出て来て見たのさ、するとこの始末だらう、驚いて物が云へないよ」初江は、俯いたま、「下駄は、此へ忘れて居たものですか、夜露に濡れてはと思つて」「思ふやうに云へないのである。「へん、甘く云へましたねわ、そ、そ、その足許は何うです、お庭へ一旦裸足で降りた證據は、お椽に足跡が加

附いてるぢやありませんか、お松は、さも憎さげに、初江の鼻頭へ顔を覗けて、「よくも、そんな嘘が云へますねわ、このザラ／＼するは何ですよ、砂ぢやありませんか、こんなことをなさるから、朝々のお掃除が遣り切れないのです、はい、あなたは、やがては立派な奥さまにお成り遊ばす方ですか、箒なんぞは手にお持ちなすつた事ないでせうけれど、私やこゝに居る葛さんでも梅さんでも、皆、下婢で、朝々はお掃除をしなけりやならない、お役目ですからねわ、こんな不潔なことをして戴いちや、旦那さまへも、奥さまへも、申譯がございませんわ」お葛は其袂を曳いて、「もう好いよ、お松ちゃん、そんな大きい聲を出しちや……、御主さまがお目覺遊ばすぢやないかね。お松は振り向いて「こんなことが黙つて居れますか、お葛さんも妙な人ですねわ」今度はお葛に喰つてかゝる、初江は、袂の端で眼を壓へて「何うぞ、堪忍遊ばして……」後は吃逆あけるのである。

(三十三)

初江が、お松に苛められて居る間に、縁は裏庭の共同椅子の側へ来た。干代田草履で、夏草の露を踏みながら縁は、空を透して人を索めるのである。「初江さん」垣根にそれらしい、黒い影を認めて聲をかける、黒い影は返事もせずには躡んで居る。「初江さんちやなくつて……」粉々匂ふ夏菊の中に立ち止つて、縁は、また聲をかける影は身動きもせねば、物も云はぬ、縁はまた見直したが、兩の袖を口に當て、ぶツ、と吹き出し、それを見たは榎木屋の忘れた、籠と蓑藁帽であつた。「當にならんものね、人の心ツてものは、併し、私の爲めには反つて幸だつたわ」云つて、濟し込んで、メンチの凭に背中を凭せて、今手折つた一輪の夏菊を鼻頭で嗅ぎながら、恍惚した形で空を仰ぐ、鬱々し、青葉が黒く麻のやうに覆ひかゝつて、葉の隙から

輝いた銀河が見る。と、人の足音がする、それが段々近寄つて来る、縁は屹と振り向く。「縁子さんいふ」聲が、向近に聞えて、人影が目前に立つ。「お待ちになりましたか」と、猫撫の低い聲は男である。「待ちましたよ」縁も、潜めた調子で云つて、白ペンキのベンチから離れると、仄白い衣物で男と向ひ合せて立つて。「あなた、今來て……誰れにも、まだ逢はなくて……」誰れにも、逢はないとは……。「い、ね、ね、此處で、若い女の人に會はないでせう……」「あなたに逢ふのが始めてです」「好かつたわ」と、縁は安心した振で「それで好いの」「これで三度ね、あなたと會ふのは」二人は並んで、ベンチに腰を着けて、縁が男の方を向く。「そうです、それで私は一年も馴染合つたやうに思ふであります」「貴郎は、醫學生ぢやないでせう、それとも苦學生……」男は、星を指されたやうな顔で。「何故です、私は醫學生です」「ぢやア、墮落醫學生ね、でも、縁日の雜

踏に紛れて、女の袂へ艶書を入れるやうな人だもの」云つて、縁は冷笑を含まながら、瘦せた蒼白い男の顔を見る、男は細い目を糸のやうにして、「それア戀です、あなたの其顔が」と縁の顔を指して「私をして、そのやうなことを敢てせしめたのです」「厭ねね」縁は、いかにも厭さうに顔を歪めて、「あなたは、見惚をする人ねね」「あなたには、誰でも、見惚をするですよ」「それでは、あんまりでありませう」云つて、男は女の顔を見る、縁は、両手で菊花を持ちながら香を嗅ぐ振で、沈と考へる。「それは、何花です、私にも嗅がせて下さいよ」縁は邪慳に振り振いで、菊花を鼻の方へ放つた。

男は、昵と其容子を見て居たが、縁子さんと、調子を改めて、「金を少し貸して下さいませんか」「お金を……」縁も、倍となる。「さうです、五拾圓ほど、是非要ることがあるのです」「五拾圓……」縁は目を睜つたが、私そんなにお金はないわ」「ないことはありますまい、このやうな立派な宅の

お子ではありませんか、金がないなら、衣物でも好いのです」「あなたに呉れるやうな衣物は、一枚だつてありません、縁は、素張と云ひ放つて、憤々と往きかける男も立ち上つて、「縁子さん、お待ちなさい、一言言ふことがある、私は、お察しの通り醫學生ではありません東洋新聞の記者です、墮落女といふ題で貴女の事を書き立てるから、その時になつて後悔なさるなと、氣色ばむで云ふ。「ね、ッ」縁は、釘付けにされたやうにそこに立ち竦む。「金も衣物も要らん、私は聲務として、墮落女を社會に紹介する」縁はヒヒと泣き出す。そこへ姿を現はしたのは初江であつた。

(三十四)

「お嬢さま」初江は、伊達巻をキリ、と締めて、下駄も穿かず裸足である。「おう、初江さん」縁は濡れた顔を上げて「救つて下さい」と、泣く、初江

は縁を賺しながら男を見向く。「初江さん……」男は獨語のやうに云つて、此方を見て居る。「貴下が新聞記者ですか」初江はツカ／＼と進み寄つて、男の顔を一下目見ると、「わッ、あなたは……」男も驚いて「初江さんですか」男は田萬里仙九郎であつた。「はい、私は初江です、貴下は母の墓所の前で私に爲すつたことを、お忘れではないでせうね」男は黙つてゐる。「それさへあるに、また、お嬢さまを弄んで、その上新聞へ書き立てるとは、何といふ卑劣な、慘酷な方でせう、私は、木陰から全然立聞きしました、それで新聞記者と云へますか、好く考へて御覽なさい、新聞記者は社會を善に導く尊い職分を持つて居る方ではございませんかそれを、まゐ、先刻のお詞は何です、お金を貸せの、衣物を呉れのと、弱い婦人を捕へて、あなたは脅喝して被居るものではございませんか、それで、新聞記者と申されますか」田萬里は、依然黙つて居る、初江は續けて、「あなたは、飽

までお嬢さまのことを新聞に書く被仰るなら、私は、墓所でなすつた、ことを警察へ訴へます」「私は、墓所で、何もした覺はありません」「ないとは云はせません、立派に證人も此方に居ります」「わの、中尉がですか、細い目を睜る。「そうです、それでも貴下は、お嬢さまのことを、お書きなさるお意ですか」田萬里はまた黙つた。初江は、此どと力を入れて「そんな不人情なことを被仰るものではございません、名譽は女の大事なものですその名譽を、新聞で傷けやうと……」初江は、袖口で眼を壓へて、「わまり、酷くはございませんか」「私が、酷いかは知りませんが、縁子さんも酷いのです」「何故でございませぬ……」田萬里は、それに應へず。「わなは、今、中尉と御夫婦でありますか」今度は、初江が其れに、答へず「晴れての御交際なさるのは宜しうございますけれど、こんな淋しい處でお會ひなさるのは、わあなたのお爲にもなりません、お嬢さまも懺悔して被居る

のですから、何うぞ、貴下も立派に懺悔して下さいよ」縁は、手を合さんばかりである。「懺悔しとるのでありますか……」田萬里は倍と縁の方を見て、他に好む男が出来たからでせう」いふ眼は、燃ゆるやうに血走つて居る

「田萬里さん」縁は、側へ寄つて、「新聞だけ、は許して下さい」云つて、また泣く。「分つたです」田萬里は奮然と、「覺わて居れッ」田萬里は、血相變へて往きかける。縁は追ひ縋つて、「永久も……、愛しますから」

(三十五)

「初江さん、鳥渡被來い」邦子に呼び止められて、初江は、廊下で襦袢と止まつた、兩手を床に支いて、「何か、御用でございますか」「用があるから呼んだのです、此方へお入んなさい」邦子の目は、平時に増して光つて居る。初江は、怖々と膝行り出で、伏し目勝に羞控へる。「初江さん、あなた

は、昨夜何處へ行きました……」長火鉢を楯にして、邦子は長煙管を膝に立てる。「はい……」初江は、彌々俯く。「はいではありません、人の寢静まつた夜中に、兩戸を開けて何處へ行く積りだつたのです、星明を見るのに下駄を抱へてる筈はありますまい、呢乎と睨んで、裸足で歩いて、廊下を汚したさうです」初江は眞紅になつてゐる。「あなたは其れで、禮作法を心得てると思つて居るのですか、宅では五六人も女を雇つて居ますけれど、土足で廊下や椽側を穢す人は貴女切です、それが一度ならこそ、毎朝足跡が附いてゐるので、お松は掃除に困ると云つて居りますよ、まわ、何んといふ事です、糞に火を附けて、「全體、何の用があつて夜中に忍んでお出なさるのです、そんなことをして貰つては、用心が悪くて困ります、まるで盗人のお稽古でもするやうな、家内の寢息を窺つて兩戸を開けるなんて、見下げ果てた人ですわね、私や最少し見所のあつた方と思つてゐました」邦子は煙

を吐きながら、ボン／＼と煙管を羽叩いて、「他人に厄介になつて居りながら、情夫を忍ばせて蟻曳をするなんて、呆れて物が云はれない」云ひ、冷たい笑ひ方をする。初江は黙つて、泣き逆つて居る。「何うしたのです、伯母さん」軍服の儘行雄が入つて来て、憂と剣を横に置いた。邦子は見迎へて、「おう、行雄さん、聞いて下さい、まわ呆れるぢやありませんか」行雄は火鉢の脇に胡坐を掻いて坐り、白い、夏手袋を脱りながら、「些と、お手柔にやつて貰ひたいね」と、微笑し、邦子も、行雄を見る目は少し笑つて「昨夜の十二時頃にね、初江さんが雨戸を開けて庭へ忍び出る處を、運悪くお松に見附けられたのですとさ」行雄は引き取つて、道理で昨夜お松が喧しく喋つて居た。それやア何んだらう、初江さん寝られないものだから、庭でも散歩しやうと思つた處を、お松が悪く邪推したのだらう、叔母さん吃度さうですよ、云つて笑つて居るそれなら。「何も、慌てることはないぢやわり

ませんか、それに下駄を抱へて居るのが曲者ですよ」「下駄を抱へて居るのは当たり前、いくら人の見てゐない夜中に、散歩するものでもまさか、裸足ぢや散歩が出来ません、ハ、ハ、ハ、」行雄は何處までも茶化す氣である。「さう云つて了へば、そんなものだけね」と邦子は顔に行雄を見る。次の間で密々、囁く聲がして居たが、此時お松が現れて、「奥さま、昨夜、何んでございますツて、その……」「ニひかけて、詰る、次の間でクス／＼笑ふ聲がする。「おう、さうでございませうと、お松は漸と思ひ附いて「昨夜一時か二時頃に帯もせず裸足のまゝで、お庭の方から歸つて被來る處を、現にお薦さんが見たのでございませうツて」「誰が裸足で歸つたか……」「行雄はお松を見る、お松は涙に咽で居る初江を指して、「この方でございませうわ」「さうですか、お松」邦子は仰山な聲で云つて、それ見たかといふやうな顔ををする。行雄は鼻で笑つて、「莫迦を云へわの寝坊助のお薦が、何で夜の

時二時頃に目が開いてるか、そんな阿房な取り次をする間に、風呂でも沸せ
お松へ一刀を浴びせてあ、熱い〜と夏服の襟を脱しながら。「初江さんも
彼方へ行くのだ」と、無理に初江を立ち去かせて了ふ。

(三十六)

「初江さん、私、感謝してよ」縁は、初江を膝近く座らせてさふ。「さ、私
私、そんなに云はれる分はないわ私、あなたの妹なんだから、義姉さん
のためには命だつて捨てるわ」初江は涙に濡れた顔で思ひ込んでさふ。「此
御禮は屹度してよ」「あら、私、お禮なんかして戴く理はないわ、それより
はね、お嬢さま」「お嬢さまつて、誰のこと……」「縁さん」初江は云ひ
直して、「あなたは心から田萬里さんを愛して居て……」「縁は強く頭を掉
つて、「誰がわんなものを……」「だつて、永久に愛するとお誓ひなすつ

たわ」「それや、うそだわ、新聞へ出すつていふんだもの」「眞實……義
姉さま」初江は、縁の左手を取る。「初江さんはそんな私だと思つて……
「思ひはしないけれど、戀は盲目なんですもの」「戀ですつて……まわ厭
いくら私だつてわんなものは戀しないわ」「屹度……」「屹度ですわ」縁
は、執られた手、上に右手を加へて、初江、手を挟みながら「縁には、理
想があつてよ」初江は心から悦んで、「それでこそ私の義姉さまよ」まだ、
涙の乾かぬ眼に、莞爾と笑を浮べ、「義姉さま」と、縁をりて、「田萬里
さんに、斷然切つて了つて下さいなねね」縁は初江を瞞めて「だつて、斷れ
て了つたら、新聞に出すわ」初江は頭を掉つて、「われはお金が欲しいから
云うたのですよ」「五十圓なんて、私には出来ないわ」縁は、困つたといふ
舉動をする、初江は俯いて、沈と考へてゐたが、「わんなもの」と交際してゐ
るのは、あなた自分、墮落の淵へお入りなされるやうなものだから、屹度、思

ひ切つて下さい、その代りお金は私が引き受てよ」「五十圓を……」緑の眼は、呆れて居る。初江は背首いて此にねね。「母から貰つた片見がありますの」云ひながら内懐から、慶長小判五枚取り出して、緑の目前に差し置き、これには亡母の云ひ残しもありませんから、命にも代へまいと思つて、今まで手放さないで居たんですけれど、姉さまの大事には代へられなくつてよわたし、こつれ田萬里さんに、貴嬢のことは屹度思ひ切らして見せますわ」「さう」緑は、心底から感謝して「濟まないわねね」初江は反つて怒めしうな目色をして、「濟まないことなんぞ些ともないわ、義姉さまのお役に立つんですもの、お金だつて本望だした母さんだつて、悦んで下さると思つてよ」「初江さん」緑は、目に涙さへ浮べて、「一生義姉さまよ」初江も、露んだ眼で莞爾と背首き「田萬里さんの住所は分つて居て……」緑は手文庫の中から封書を取り出し、「こゝなの」初江は其れを手にして「では、私これ

から行つてよ……」云つて立ち上り白い西洋前掛の紐を解きかける。「何處へ行くツ……」云ひながら、入つて来たのは和服の行雄である。初江は一目見るとハツとして心臓の血を沸かせたが、其目を縁に落した時、冷な態になつて、「書店へですわねね」云つて、初江と縁は背首き合ふ。庭は、明々と日が射して、青葉が好い色に透いて見えて居るのに、ゴロ／＼と雷が遠方の方で鳴つてゐる。

(三十七)

懐中鏡を古机の上に立てかけて、顔を長くしながら、二八水を塗つて居るのは田萬里である。引出から安もの、チツクを取り出して猫毛の髪に摺り付けて、黄楊櫛で頭を七三に分けて睨と鏡に映して見たが、睨の下つた細い目が氣になつたかして、右手の指頭で狐のやうに釣つて見たり、横に延

べて見たりする。「田萬里さん、艶飾ですわね」云ひく、四疊半の此處へ入つて来たのは、四十格好の女である。田萬里は慌て、化粧道具を机の下に隠し、素知らぬ顔をして「やあ、お女将さんですか」女将は、鼻をペココさせて、「まあ、好い匂だこと、チツクですわね」「チツクなんぞは、附けはしませんかな」「だつて、お頭が、眞鍮の帽子掛のやうに、テカ〜と光つて居ますよ」少し笑つたが、女将は直ぐに眞面目になつて、一時に宿料を何うして下さるのです、今日はやる明日は送つて来ると被仰つたつて、爲替のカの字も来んぢやありませんか」「大丈夫です、……昨夜、探す人に逢つたのですから、近々の内には是非拂ひます」「お探しなさる方といふと、初江さんとかいふ別嬪さんですか」「さうです、私の妻です、昨夜妙などてから見附たのです、近々には是非支拂ひます」女将は冷笑して「わたしの近々も古いもんですが、こん度は間違ありますまいね、そしてお神さんは此

方で何をして被居るのです」「妻ですか、小間使をして居るのです、それはまあ、女将さんにでも一ト目見せたいですよ」とニヤリと笑む、女将は可笑いのを耐へて「田萬里さんのお神さんでしたら、甚麼にか別嬪さんでございませう、あなた男前が好いから、云つて、調弄すやうな目附をする、田萬里は潮垂れた、禿ちよろの單衣を氣にしながら、目を細くして嬌態をして見せる、女將は笑を齒み殺して「併し、腹の好くない方ですわね、大枚なお金を持ち逃げするなんて」「それには深い事情があるですよ、林の伯母が神經持ちで、妻も辛棒が出来なかつたです」「御亭主のあなたが爾んなお氣なら分はない……」「金も僅です、小判の五六枚であります」「小判の五六枚と云へば、今は黄金の値が上がつて居ますから、一枚十圓には兩替して呉れますよ、大したものぢやありませんか、それを費消はすに持つて被居れば好うござんがねね」「持つて居らんでも好いのです、半月さんから少し金を貰

ふことになつて居るですから」「何か、新聞の材料でもお呈げなすつたので
 すか」「さういふ分でもないですが」「材料と云へば半月さんは、田萬里の
 妻君のことが事實だと、三面記事には持つて來いの豔種だが、と、被仰て
 ました」「さようですか」田萬里は、勿體らしく指頭で髪を撫で附け「實際
 だから、戴して下されば好いのです、成るべくなら、私の寫眞を挿繪に入れて
 甘いこと書いて貰ひたいでありますかなわ」「それこそ、情婦が出來過ぎま
 せうよ、ホ、ハ、ハ、ハ、」女將は、存分に笑つて、立ちかける、と、恰と、
 パナマ帽に、五ツ紋の縞羽織を着た鬚面の男が、隣の十疊の間へ戻つて來て
 襖越に大きく、「田萬里君、君の所謂妻君が訪ねて來てるせ、素的な美
 人だ、大阪にだつて彼んなのは居ない女將も降りて見たまへ」この男が半
 月である。

(三十八)

床が、ミシ／＼と鳴つて背後の襖が、コト／＼と開く、初江は居苦しい思
 ひをしながら、田萬里と差向いて居る。「好く、私の宿が分つたの、探すに
 困つたであらう、田萬里は、平手で髪を撫でながらいふ、「車で参りました
 ら、直ぐに分りました、初江は、凍どした聲で云つて、室の内を見廻す、室
 には、古机が一脚と、垢で黒くなつた支那靴とか身代らしく、鴨居の釘に
 引つかけた麥藁帽の日に焼けて赤くなつて居る。田萬里も、襖の外へ氣を散
 らせて「少時逢はん間に全で見違へるやうになつたわれから煩ひはしなんだ
 かね」「田萬里さん」初江は白襟を合はせて「私は大切な御用で來たので
 から、誰も立聞かないやうにして下さい」「諾々」云つて、田萬里が立ち上
 ると、パタリ誰やら襖間に打突かつて逃げる足の音がする。「視目をしては

好けんでありませす。四五人の男女が、階段口から消え行くのを見届けて、田
 萬里は座に直り、大切な御用とは何でありますか。詞の調子を改める。「緑
 さんのお使に参りましたの。」「緑子さんの……」云つて、初江の淡紅色の
 袖口から目を放して、眩しさうに初江の眼元を見る。「田萬里さん、貴下は
 何の爲めに活て被居るのです、只、空に時間を消すためではございませ
 い、何か前途に、光のやうなものを認めて、それを目的に歲月を送つて被
 居るのでせう、ね、正可、婦人の心や肉を弄ぶるために、生きて被居る
 のではございませすまい、あなたは、まだお若いから、途中で遊んで居ても容
 易に日は暮れまいと思つて被居るかは知りませんが人間の老るはと迅いも
 のはございませせん、立派な男子の方で被居りながら色の爲めに一生を誤る
 のは、神様に對しても濟みませんし、やがては貴下、自身にも、後悔なさる
 時が屹度参ります、田萬里さん、此に五十圓でございませすから」初江は、十圓

札五枚を前に置いて、「これを資本として、前途の、輝いた光の方へ、脇目
 も振らずに進んで下さい、お金は勘うでございませすけれど、これには活きた血
 が入つて居ります、緑さんは、自分一人、明い道に戻つては濟まない、あな
 たにも、暗い道から出て貰つて、立派な男子になつて戴きたいばかりに、な
 らぬ中からはれだけ拵へて下さつたのです過去ことは何事も過去こと、して
 わなたも今日限り生れ變つて下さい、初江の美しい顔には犯し難い光と、骨
 に沁むやうな愛とが、氣高く溢れて見ゆる。田萬里の目は、新しい紙幣ば
 かり見てゐる、初江は詞を亞いで、「貴下も、今が大事な時代でせうし、緑
 さんも今が大切な身の上ですから、これを限りに交際を斷つて下さい、それ
 がやがてお二人の幸福となるのですから。初江は田萬里の前に兩手を支いて
 「田萬里さん、私は貴下に怨はあります、恩はございませんよ、その私が
 斯うしてお願ひいたします、何卒、緑さんと關係を斷つて下さい、それでな

ければ、義姉さんは……」堪へかねて牛帕で顔を蔽ひ一墮落してお了ひなさるか知れません」いふ聲は、涙に微れて居た。田萬里は、細い目を凄くして「それでは何でありますか、私と縁子さんとの間を、切れて呉れと云ふのでありますか、云つて睨めるやうに初江を見たが、怖ろしく聲を擧げて、
 「他に好む男が、出来たでありますな」「決して」初江は力を凝めて「そんなことは微塵もございません、そんな縁さんでしたら、何でお金なぞ」云つて、紙幣を押し遣り、「これで、あなたも、立派な男子になつて下さいまし札を見ると、田萬里も羨れて、沈と考へ込む、やがて、倍と初江の指環に目を附けて。「その指環を下さい、そしたら、全然に絶縁で與けるです」

(三十九)

「この指環を……」初江は、呆れる。「さうです、これをお呉れなさい」

ら、縁子さんの事は思ひ切りれず、田萬里は冷かにいふ。「これだけは」初江は術なさいうに「母の形見ですから……、その代り、此外的ものでしたら、何んなものでもお呈け申します」「いや、それが好むです、其指環と、金とを下さい、それが嫌なら、金も要らんであります、私にも考へがあるです」田萬里は俄に強くなる。「これだけは、お情ですから……」「好むであります、何にも要らんであります、云つて立ち上つて、血相まで變へて、
 「私も男である、是までに二三十人の女と關係して来たが、女十から縁を切つて呉れと云はれたのは此度が最初だ、縁子の尼ツちよ、何うするか見て居るが好む」「あなたは」初江は、眞着になつて「縁さんを何うしやうと被仰るのですか」田萬里はグツと、初江を睨め附けて、「縁奴を殺して」「ね、ツ」初江が、顔ひ上るを見済して一段と物凄く「私も首を縊つて死ぬるばかりだ」「田、田萬里さん……」田萬里の脚下に縋り附いて「指環は呈げま

すから、そ、そんな怖ろしいことは……」初江は泣き伏す。泣き伏しながら、何やら云つて居る「義姉さま」といふ聲が袖を洩れて隣に聞ゆる。

* * * * *

「妻に貰つたのであります」右手に箝めた純金の指環を、半月の目前に突きつけて、低い鼻を高々とさせて居る田萬里の横合から、女將は口を覗けて「眞實に貴下は、女たらしですね、ホト／＼感心しました、あんな別嬪を泣かせたり、金を貰つたり、加／＼に指環まで取り上げて了ふなんて、全く凄腕ですよ」半月は、鼻で笑つて居たが、可哀想な女だ、あれ位ゐる美人で居て墜落してるとは「……くですね、あれ位ゐる容色だつたら、何な出世でも出来たものをね、借るのですよ」「そこに、蓼食ふ虫の好きずきがあるんだ」「さうですよ、さうですよ」女將は切に感心して「田萬里さん、驕んな

なさいよ」と、脊中をヒシヤリと打つ、打たれて、田萬里は氣取つた態で、「驕るであります、が、まず、此の借金を拂つて、衣物を拵へて……」田萬里は莞爾もので指を折る、「一體金は、幾何巻き上げたのだい……と半月が聞く田萬里は片手を廣げて、「五十圓」「五十圓」半月は呆れて、「君も女にかけちやア疎腕家だが、初江とかいふ女、いや、君の所謂妻君も却々の健ものだ、その父親は分らんのかね……」「それが分らんのであります、母親は奈加子で、これは分つて居ります」「ちやア父なしか」半月は笑つたが、鬚を捻つて切に考へ、今の居處は桃山の村山とか云つたね」「さうであります」田萬里はまた北叟笑んで、「賣つたら、何程ぐらゐるものであります、云つて、指環を抜いて女將に見せる女將は掌に載せて「さうすねね、何奴ありませう」と、重さを量つて居る。「それ」と、半月が手に取つて、鼻先で捻くツて居たが、「何やら彫り附けてあるせ」、云ひ

指環の内側を覗いて見て「贈奈加子」は、ア、こゝに母親の名が彫つてある、それから、一條正治か、首を捻つて、また一條正治、女將も田萬里も黙つて眼の玉ばかり活らせてゐる、半月は横手を打つ、飛拍子な聲で、「さうだ、一條正治は四師團の大佐で、男爵だ、さる、捕へたといふ顔である。

(四十)

「金さん、金さん、車夫の金藏は、お松に揺り起されて、寢轉つたま、長く延をする。「日那がお留守だと思つて、太平樂に晝寝なんぞしてゐるんだよ、ちよいと、鳥渡金さんツてばよう」お松は懸命に揺り起す。「なんだなア、喧しい、ちよつと、舌打をして「人が折角好い氣持に寢込んでるところを」、「氣樂を云つてるよ、此人は、ちよいとちよいと、大變なんだからさ」何

が大變なんだよ、金藏は眠い目を開けて、大きく欠伸をしながら、ボリ／＼と頸筋から胸の邊を掻く。お松は大阪新聞を目の前につきつけて、「ちよいと、これを讀んで聞かせてお呉れな、初江さんのことが出てゐるんだからさ、車夫部屋の窓から、蒸た風が吹き込んで、新聞紙の頁を片々させる。「初江さんのことが何うしたつて」「確乎お爲よ」お松はビシヤリと金さんの膝小僧を叩いて、抜衣紋で風を入れ「初江さんの悪口が出てゐるんださうだから一寸讀んで聞かせてお呉れな」「悪口が出てゐる……」金藏は漸と目を覺して、腹掛から手拭を取り出し、顔から頸の汗を拭いて「どれ、見せなせぬ」お松は、新聞を覗き込んで、出てゐるだらう」「何も出ちやア居ねせぬ」「出てゐないツて……金さん、そんなことはないよ、前刻魚屋が来てさ、云つてたんだから、桃山の村山とあるだらう……」眉を寄せる。「わア、ある／＼、これだな」「あるかい……」お松は勇み立つて「何とあるね」

金藏はやつと読み出す「お、と、初のお目見得、これは落語家の提灯か、名古屋の人殺し、これでもねね、墮落美人、これだな、華族の落胤と書き添へて、下に？のやうなものが加附いてる、華族の落胤とあるから、これでもあるめね」
 「それ、それなんだよ、魚屋も華族さま、何とか云つてたツけ」「さうだ、さうだ、お、高貴の家、天與の美、い、貌を持ちながら、自ら墮落の淵に沈みて、お、わつたら花の盛りを、仇し男の玩弄物、おもちゃとなり居れる、妙齡……妙齡の女わり處はわア、市内……」
 読みつづけるを、お松は手で止めて、何のことだか些とも分りやしない、それより一應金さんが読んでね、跡で講釋を聞かせてお呉れな」
 金藏は笑つて這度は口の内で読んでゐたが「おう、成程、は、ア、道理で」など、獨り受け返答をしながら、首を捻つたり、目を張つたり、種々な格好をして居たが、読み終ると、新聞を手から落して、「人は、見かけに依らねぬもんだな

「何うしたのさ、金さん、早く聞かせてお呉れな」
 お松は、焦燥しさうに、金さんを促す。金藏は、昵と見て、「初江さんは、一條男爵の姪様だらうツてんだね、ところが大の浮氣女で、これまで幾人も情人を作つたが、近頃ちや、某る墮落した貧乏書生と加附いて、大事の純金の指環まで貰いでるとある、何うでい、呆れ返るぢやねねか、あんな男の膚は見たこともねねやうな風附をして居て、……驚いたものだねね」
 實際、驚いた顔である。お松は莞爾して「さう書いてあるかい」さる、勝ち誇つた態で、「だから云はないこつちやない、毎晩お庭へ忍び出るのも……」
 云つて、首を傾げて、「それちやア、思はくが違ふが、他に書生の情夫があるんぢやなくつて「有ると、出ちやア居るんだが……」
 金さんは、疑はしい首を捻る、お松は胸を撫で下して「わア、この胸がスキ／＼して來た、ホホ、／＼高らかに笑ふのである。」

(四十一)

長剣を衣桁の端に懸けて、行雄は軍服を脱ぎにかゝる。お松は折目正しく疊みながら、「若様、若様一行雄は、裸體になつて、西洋手拭で脇下の汗を拭いて居る。顔の淺黒い色が、頸筋で劇然と襟の痕を附けて、膚の白さが際立つて立派に見ゆる。」「若様、お松は洋袴の足を耳ねて、「初江さんのことが新聞に出て居りますよ、云つて、行雄の氣を引くやうな上目を使ふ。「新聞に出て居る、誰のことが……」行雄は上の空らしい。「初江さんのことですよ」「初江さんのこと……」褒めてあるか」「い、い、い」お松は強く首を掉つて。「初江さんには、情夫がございますのですよ」「いろは誰にでもあるの、お松の色は、櫻、色ぢやない」云ひく、セルの單衣の袖を通して、眞紅に咲いた庭の柘榴花を見下して居たが、さうく、熱した柘榴の様な色だ、ハ、ハ、

「何うせ、私は柘榴ですよ、お松は昂然としながら、這度は、汗で濡れた襦袢やズボン下を、椽の欄干へ擴げて于す。行雄は、紺木綿の兵古を、ぐるぐると腰に巻いて机の前の革蒲團に臀を据ゑる。「嘘だと思つて被居るのでございませう……」お松は怨めしさうな顔で、行雄をチロリと見たが座敷に散かつた靴下を拾ひ上げて、疊んだ服と一緒に片附ける。行雄は、糞に火を附けて、何か欲しいなア、お松、平野水でも貰つて来て呉れ」「はい」「快く畏つて」「本當に呆れた方ですよ、毎晩、お庭で嬉曳して居たのです」「さうか、困つた女だな、早く平野水を持つて来て呉れ」「はい」お松は、また畏まつて、こん度は、アタフタと駈けるやうに下りて行つたが、不思議な程早目に戻つて来て、煙の栓を切りかけ、「驚いた方でせう、大枚のお金を貰いだり、金純の指環まで其情夫に呉れて與つたのですとさ」お松は、嘖々と喋り出す。行雄は、只、首で返事をして、敷島を灰にして吐月峯

へ落す。お松は、コップに浪々と平野水を注いで「奥さまも大變御立腹で被居いましたわんなことをお捨て置き遊ばしたら、それこそ一家の治りが附きません、若様 さうでございませう……」
 行雄は、倍とお松を見て「奥さんが怒つてる……何故だ……」
 「何故つて貴下、さうぢやございませんか、私だつて憤りますわ」
 「何故憤るんだ、初江さんが何か怒るやうな事でもしたのか」
 行雄は大分身を入れて聞く、お松は得意になつて、「誰だつて怒りますよ、こんな事をして怒らぬものは一人だつてありませんよ、若様のお口添がわつたとは云ひ定、此に斯うして被居れば此家の厄介者同様ぢやございせんか、その厄介者が、情夫をお庭内へ併れ込むなんて大體お主様を馬鹿にした仕打でございますよ」
 「情夫を連れ込む……そんな馬鹿なことがあるか」
 行雄は腹から笑つて「三昨日もそんなことを云つたぢやないか」
 「それがでございます、若様、こゝでございますよ、あの時だつ

て貴下は反對に私たちをお遣り込め遊ばしたけれど、隠すより現れるで、奥さまや私等よりも世間が好く知つて居ます、第一、今日の新聞を御覽遊ばせそれは、それは、氣持の好い程詳しく出て居りますから、生れが處で、母親が何といふ名で掛環の内側に何と云ふ字が彫つて、お松が間斷無に喋べりかけると、行雄は苦い顔になつて、「それや、誰か中傷の投書でもしたんだらう、それで伯母さんが憤つてるのか、詰らない」
 云つて底越しに、牛乳色の雲を仰いで、苦い笑ひ方をして見せたが、「併し、新聞に出たのが事實とすれば、放棄ては置けないね、獨語のやうに云ふ。お松は晴々とした笑顔になつて、若様だつて爾う思召しませう、初江さんは元來が浮氣な性分ですよ」
 「馬鹿を云へ」
 行雄に叱り附けられて、お松は口惜さうに呆れて居る、そこへ新聞を提げて這入て來たのは邦子であつた。

(四十二)

「お松は、階下へ行つてお在でなさい」云ひながら、行雄に對向つて座る。邦子の氣色は、何時になく慳々して居る。邦子は、お松の後ろ姿を見送つてさて、改めて、「行雄さん」いふ聲は、態と沈着して居た。行雄は、先刻から伯母の氣色を見て、此方大分風が荒いな、と云つたやうな目を、少し笑はせて、「はア」その調子から受け身の格である。邦子は、新聞の三面を開いて「これを読んで見て下さい、」行雄は笑つて、大分お氣に障つてると見ゆるねね「行雄さん、笑ひ事ぢやありませんよ。這度のことばは、我家に取つて重大な問題ですから、貴郎にも決心して貰はなけりやなりません、まわ新聞を読んで見て下さいよ」「體何うしたと云ふんです。初江さんが落してるとでも書てあるのですか」「まわ、読んで見て下さい、甚麼ことが書いて

あるか、云つて、新聞を押し遣る。行雄は、目も觸れずに「新聞なんてものは當になるものぢやありませんよ」「貴郎のやうに云つて了へば、それまですけれど、私は信じます、初江さんの平素の行爲と照り合せて、一々、符を合すやうに思ひます」「初江さんも、酷く、不信用な女になつたのですねね」云つて、腹の底から搔すつたやうな笑ひ方をする。邦子は忌々しうに行雄を睨めて、「貴郎は初江さんを愛してるのでせう……」云つて、氣色ばむ。行雄は平氣で、「愛してますとも、愛して居なくちや、斯んな世話は出来ません」「貴下は愛に溺れて被居る」却々強い詞である。「溺れてるかも知れませんかね、いや、それより、戀してるかも知れんねね」邦子は、唇まで顔はせたが、態と、とつしりした態度で、「それは、愛するなりと戀するなりと貴郎の勝手になさるがよろしい」と、冷かに云つて、「併しねね行雄さん、彼んな墮落した女と、縁を一緒に置くことは能きませんから」

いふ間に邦子は逆上つて了つて、「何處か外で世話をして與けて下さい、縁も嫁入り前の大切な身ですから、彼れまで墮落させられては、それこそ生き甲斐のない程残念に思ひます、何うぞ爾うして下さい、彼んな色氣知らずの謹慎一方の縁でも、根が女ですから、何んな迷の起きまいものでもありません、これだけは折入つてお願い致します」行雄は、居すまゐを直して、何の點が伯母さんのお氣に入らないのか知らないが、新聞の艶聞、殊に東洋新聞のやうな不信用な新聞に掲げたからつて、それを一々取り上げて居た日には幾人自殺者が出るか、人殺しが出来れば知れやしません、新聞には誤報といふことが間々あるですから、事實を能く調べた上でなければ、浮と信ずる事は出来ませんよ」「事實だから仕方がないぢやありませんか、私はよく知つてゐます」「また、庭園へ忍び出た一件でせう、行雄は笑止な顔をする。「そんなことではありません、貴郎はまだ知らないでせうが、一昨日家を出

るまで現在箆めてゐた指環が、それツ切、初江さんの手にないから、内々不審に思つてれば何うでせう、それが丁ど新聞種になつてゐるぢやありませんか」「初江の指に指環の影が無いのですか……」行雄も流石に眼を睜つたが、其眼を直に笑はせて、「そんな分はない筈だ」

(四十三)

初江の居間の襖は、此蒸し熱いのに閉め込んでゐる、其外に立つて、室内を隙見して居るのは縁であつた。縁は、彼方此方見廻はして、忍びやかに襖を開ける、狭い室の隅に置いた行李に俯伏して、白い西洋前掛けを隠しながら、潜々と泣いて居るは初江である、薄藍色の花簪が、戦々と慄へて居る。縁は、襖の框を片手で持ち、片手を垂て、落着のない目をギロ／＼させながら、闕際に立盡す。蟬の聲も聞えず、明い晝の光線も射さぬ薄晴い

部屋の中は湿やかな陰に籠つて見るから涙が零れさうである、隣の女中部屋からは、態と張り上げた女中の聲が手に取るやうに聞える。

* * *

「私のことが、彼んなに新聞へ出た日にや私や生きちや居ないね」これはお松の聲である。「生きて居ない何故さ」これはお蔭。「生きて居ないよ、生きて居られるものかねね、考へて御覧な、水性の浮気もので、これまで幾人の男に關係したか知れないなんて、随分惨い事が書いてあるんぢやないか」「あつたつて好いやね、小野の小町も裸足で逃げさうな美人と書いてあるんぢやないか、すれば差引き勘定無しさ」「お蔭さん、氣が廣いわねね」「おまけにさ華族の落魄かも知れないと出てるぢやないか、假し偽言にもしろちよつと聞きが好いちやないか」「華族の姫様だつて？、へん聞いて呆れる

よ、あんな色狂ひが華族さまだつたら、私なんぞ公爵のお嬢様さ」「だから、根も葉もない拵へ事で、新聞屋が面白く書いたんだと云つてるぢやないか」「私の宅なんぞ、魚屋こそ爲てるけれど随分身持は可いからねね」「何んなことでございますか、よく／＼世間を聞き合せて見ませうよ」

* * *

「初江さん！」縁は、初江の肩に手をかけて、「察してよ……」「云つて、眼を壓へる。「義姉さま……」下唇の裂けるは白い前歯で噛み締めながら初江の眼からは止め度もなく涙が溢れた。「許して下さい、皆、私の所爲よ」「許すも許さぬもないわ、みんな義姉妹の間なんですもの」「私のことまで、阿母さんに知れたら、私、何うしやう、云つて、縁は泣く。「義姉さま」初江は、縁の手を把つて、「そんな御心配は些ども、要らなくツてよ

私、口が千切れてもあなたのことには云はないから其代り、其代り、これから、彼んな人と關係して下すつたら、私、義姉さまをお恨みしてよ」いふ間にも、涙はハラ／＼と頬を轉ぶのである。

(四十四)

「何だ、泣いてるのか」思ひがけなく行雄が後に立つて居る、二人はハツと涙を隠す。行雄は笑つて、緑さん泣いてるぢやないか」緑は、座に堪へぬ態で、袂で顔を隠して出て行く、初江は、前掛で眼許を拭いて、何うぞ、お敷き遊ばして云つて、片隅の、更紗の座蒲團を裏返して出す。行雄は、其れを見たばつかりで敷きもせず、胡座を掻いて、「新聞が何とからだつて、伯母さんは酷く喧しく云つてるんだが、初江さん、一體何うしたんだ？」初江は丁と座つて、俯いて黙つて居る。「新聞へ書かれることでもしたのかね

聞いても返事をせぬので、初江さんに限つて、そんなことならう答のないのは僕は固く信じて居る、何か間違へられるやうなことでもしたんだらう詳しく僕に聞かせ玉へ」思ひ込んで云ふ。初江は、沈として居る。「詰らない新聞でも、世間は案外蒼蠅いものだから、間違ひなら間違ひで取消もしなげやならんし、事に依つたら、名譽回復の訴へも起さなくツちやならない、貴嬢は殊に、これから世の中へ出る身だから、放棄つて置いては將來の爲めにもならん、それに、跡形のないことでも、新聞へ書き立てると、伯母を始め世間の人が爾う信ずる、小い事なら關はないで好いけれど、婦人の素行と云ふ點に於ては大した問題だ」それでも初江は、固くなるばかり依然口を噤んで居る。「それとも何か、情夫でも有るのかい」云つて行雄は、淋しく笑つて見せる。「藤井さん」初江は、佶と頭を上げて「私は何にも申しません、只、神様が御存じで被居います」切張した云ひ方である、行雄は頷いて、

心に疼しいことさへなくば、世間の誤解は怖るゝに足らんといふ譯だね」
 一旦襦袢を捻つて「初江さんの立場からは、其外に道はあまるまい、ちやア、新聞のことは自然に任すつもりだな」云つて行雄は暢氣らしく笑つたが、「指環は？、初江さん」「お、ッ」初江は眼を睜つて、膝に置いた、兩手を、牛帕で包むやうに隠し「指環ですか？……」指環さ」と、事もなげに云つて「あゝあるだらう？」さもあることを信じて居るらしい調子である。初江は苦ししい思ひをする。「あるだらう？」行雄は重ねて聞いて。「そんな事情があつても、正可、亡母さんの片見を捨てることはあまるまいね一僣しく云はれて、初江は堪へかねたやうに、行雄の前に俯伏して、牛帕を嚙んで聲を忍ぶ。行雄は、訝かしさうに、其態度を見て居たが、やがて座り直して、腕を拱みながら首垂れる。「何うです行雄さん、私の云つたことが嘘ですか？」云ひ、襦袢の蔭から現はれたのは邦子であつた。行雄は黙つて、眼を瞑つて居

る。邦子は二人の横手に坐つて、「行雄さんは、初江さんの容色に眼が暗んでるから駄目だ」行雄は、信ど、邦子の横顔を見たが、思ひ直した體で、また萎れて了ふ。「初江さん」邦子は初江を覗き込んで、「指環は書生に與つたのでせう、お、初江さん、華族様の姫様はね、姫様らしく好い加減に白状するものですよ、貴嬢がイクラ指環を與つたつて、それが爲めに見捨てるやうな行雄さんぢやないんだから、安心して云つてお了ひなさい、縁などは平「でも、もつと薩張した處がありませうよ」奥さんは甘いことを被仰る、しつかり〜」と、助けるやうなお松の聲が、隔ての襦袢の外から聞ゆる。初江は聲を忍んで泣く。

(四十五)

「伯母さん」行雄は開き直つて「そんな皮肉を云ふものぢやない、縁さんだ

つて妙齡の女だ、何時、何んを誤解を招くことがわるかも知れません」「御忠告は有難う、併しね行雄さん、私の育てた縁はね、世間の人から指一本でも指されるやうなことをさせては置きませんよ、其邊は御安心下さいまし」

濟し込んで傍を向く。行雄は鼻で笑つて「そんな高言を吐くものぢや有りません、誤解は其人の運命です、運命はイクラ伯母さんだつて、支配すること出来ないのでせう」云つたが直ぐに氣を變へて、「初江さん」と、初江に向き「指環は有るのかね無のかね、有れば無論のこと、ないからと云つて、強ち男子に呉れてやつたと鑑定は下せない、捨てることもあれば、盗まれることもある。邦子は昂然と脇を向く。初江は、涙に充血した眼で、行雄を見上げて、一ゆ、許して下さい……」云つて、また泣き伏す。邦子は、氣味好ささうに行雄を見て、行雄さん、貴郎も随分、思ひ切りの好くない人ね、イクラ指環が持たせて置きたくても、本人が、愛した男に呉れて與つてらん

だから仕方がないぢやないかね」行雄は、また腕を拱いて黙る、邦子は圖に乗つて「初江さん」と、這度は初江に向いて、「あなたには、洵、氣の毒ですけれど、今日限り我家を出て貰はねばなりませんよ、貴女が、亡母さんの爲めには大事なお嬢さんで被居る通り、縁は私の爲めに掛け替のない一人娘ですから、傷物にでもされて了ふと取り返しが附きませんからね、これに、わ、して二十歳になる今日まで宅で遊ばせて居るのも、彼れを何うかして出世させよう、立派な男に片附けさせやうと思ふ私の精一杯からなのですから、貴女と同居して居たり、朝夕仲よく交際して貰つて居ては何時何んな氣の迷ひが出ぬとも限りませんから、何うぞ、私を助けると思つて何處かへ轉つて下さい、主人の私が、斯うして手を支いてお願ひするのですから」云つて、兩手を壁に支かうとする。「勿體ない奥さま」初江は慌て、其手を止めて、「今日限り……」ハラ〜と熱い涙を零して「お暇いたします、

……」口惜しさが、胸元まで嘔逆て来るのを、初江は半帕を嚙んで堪へる。行雄の、瞋いだ眼からは、白い玉が、粒々と沸いて出る、それを落すまいと仰向いて、邦子に見られぬやうに掌で壓へた。邦子も、流石に眼だけは露ませて「さうして下さい、後生ですから、初江さんも亡母さんさへ生きてお居でなすつたら、斯うまでも墮落はなさるまいけれど……」初江は堪へかねて、口惜し涙に咽せる邦子は詞を續けて、「阿母さんに早く死別れたのが、貴女の不幸です、併し、これも前の世の約束と思つて、諦めるより仕方がありません」云つて、行李に目を附け、荷拵へは松にも手傳はせて與げます、云つて、お松を呼ぶ。お松は、つい、鼻先の襖の蔭から返事をして勇み立つて現はれて来る「お召しでございましたか」「初江さんが荷拵へなさるからね、お前お手傳ひして與げな」「は、は、は、は、は、は、お松は威勢の好い聲で、お前、押へ切れぬやうな悦びを圓い顔に溢へて、「さア初江さん、お手傳

ひ致します、行李を縛りませうか、何かお入れになりますか」云つて行李に手をかける。行雄は、お松を睨め附けて、「待てッ」其眼は血走つて居た。

(四十六)

行雄に睨め附けられて、お松は其處に立つたま、「何う致すのでございませす」「何うしても好い、控へて居れ」行雄は顔色まで變ていふ。邦子は聞き替めて、「何ですか行雄さん、私が云ひ附けて、お松に手傳はせるのが、あなたお氣に入りますせんか」「伯母さん」行雄は冷淡な調子で「そんな無情なことをいふものぢやありませんあなたが縁さんに可愛く思てんお居でなする通り、初江さんの阿母さんも初江さんは可愛いのです、これが反對に、初江さんの境遇が縁さんであつたら、伯母さんは何うなさる、少しは思ひ遣り、同情といふことがなくては好けません、自分の娘は可愛い、他人の娘は何う

なつても好いといふ、そんな薄情な仕方なをなさるものぢやない、初江さんに
 軒宅つて呉れと被仰つたところで、初江さんは何處に行く處があります、荷
 物を藏ひ込んで見たところで、初江さんは忽ち今夜の寢處に窮するではあり
 ませんか」「お金さへあつたら何處へでも泊れます」「お金を何處に持つて
 ます?」「何處かにあるでせう、書生に五十圓も呉れて遣るやうなお金持な
 んだもの、お金ないとは云はせません」「五十圓?、そんな莫迦なことはな
 い」行雄は冷笑をする。「おや、邦子も冷笑して「五十圓を小遣に貰いで
 與つた事を知らないのですか」「そんな莫迦なことがあるものですか」「あ
 るんだから詮方がないぢやありませんか。」「新聞へも出て居りますよ」お
 松まで口を入れる。行雄は、少し考へて、「初江さん」と、初江を見見し、
 「亡母さんの、今一個の片見だけは、膚身離さずお持だらうね」初江は、我
 れと我が身を、抱き締めるやうにして「もう、もう、何にも被仰らないで下

さいまし、わ、あなたには申譯でございせん」また泣くのである。行雄は
 軀を固くして、眼を瞑つて、深い溜息まで吐き、沈ど、苦しい顔をして居
 たが、また、柔な姿になつて、聲も優しく、併し、哀しい聲で、「初江さ
 ん、貴嬢は彌々墮落したのですか……」「く、口惜しうございませ……、
 わ、貴郎にまで……」「初江は、溜らず、聲を上げて泣く、行雄は、何か、
 思ひ入つた態で、掌で眼を摩ると、凍とした姿勢に化つて、「止むを得ま
 せん、初江さんを僕の同僚の宅へ預ける、云つて立ち上り、「お松、仕度を
 手傳つて好い」行雄が電話室の方へ行きかける、初江は借と濡た顔を上げて
 そのうしすがたを見ながら、「み、み、緑……」「辯解をしかけると、襖の障で
 其後ろ姿を見ながら、「み、み、緑……」「辯解をしかけると、襖の障で
 は緑が、其顔を見て手を合せて行雄が立ち止つて振り向く、初江は緑と目を
 見合せて、襟と口を嚙んで、また、聲を擧げて泣き伏した。そこへ、お梅
 が出て来て、一通の封書を行雄に渡し、「支關で、お待ちになつて居ります

行雄は肩を懸めて、封書の裏を見て居たが「小泉大尉から」云つて首を傾けて、封を切る始終を讀む間に、肩は延び顔は明くなつて、「梅、今來て居る方は年老つた御婦人か？」「はい、六十あまりの、品の好い御隠居様で被仰います」行雄は頷いて、「直ぐに此方へお通し申せ」

(四十七)

行雄は、俯伏した初江の後ろに坐つて居る、邦子もお松も、不審さうに客を迎へる、そこへお梅に導かれて入つて來たのは、お納戸色の單衣に、茶の帯を結んだ、小軀の、色白な、品の好い老婦人であつた。「私が、藤井行雄です、小泉大尉には、平素一ト方ならぬ御芳情を蒙るもので、一度は、奥様にも御挨拶に出なければならぬと思ひながら、今に至り失禮を致して居ります、云つて、行雄は丁寧に辭儀をする、老婦人は、白髪茶筌を、低く

曲めて、細面(こまおもて)の皺を、優しく見せながら、初對面の口上を簡単に述べて、「飛んだ、お邪魔を致します」大尉からの、御書面の趣は、慥に承知いたしました、お問合せの件は、一々思ひ當る節ばかりで、多分、お察し通りかと存じますが、尚ほ、御念の爲めに、本人に御紹介いたしませう」老婦人は、一ト膝進めて、「あの、相違あるまいと被仰るのでございますか」「そうですね、十中の九分まで、相違あるまいと推察いたします」「十中の九分まで」老婦人の眼は、悦びの色に輝いでゐる。「はい」行雄は頷いて、「新聞の記事に就きましては、疑念を抱く點もございませんが、兎角、新聞記事と申しますものは、針小棒大に書きたがるものですから、御心痛なされるほどの大事でもないかと存じます」「はい、はい」頻りに白髪を領かせる。「本人の性格、平時の素行に就いては、私は非常に敬服して居りましたもので、今度、記事の如きは、實は、意外の意外殆んど、何者かの中傷とよりは信じら

れませぬ。私は、飽くまで新聞には信を置きませぬ方で」「はい、はい」
 細面は、ますく晴やかである」「また、本人の父君のことは、大尉から
 承るのが最初で、記念すべき指環には、父君のお名前まで彫り付けてあ
 らうとは更に氣附きませんでした。母君のお生れは名古屋といふこと、お
 名前が奈加子様と仰せらるゝといふことは、私が廣島の師團に居ります時
 から、承知して居りました。「奈加子様……」婦人は、懐紙で、ちよいと
 眼を壓へて「廣島で、お亡くなり遊ばしましたとか……」「はい、今から
 四年前と承りました」行雄は、改めて「そして、男爵閣下は、今に到り
 御獨身で、御本人を御探索？」「はは、それは、それは、大の子煩悩で、被
 居いまして、姫様の事を仰せ出で遊ばさぬことは、只の一日もございませ
 位で、私も、聾の小泉も、川澄家も、手を替へ品を替へて、八九年以
 来、お深し申して居りましたやうな次第で、私はまた別して、奥様にはお

馴染もございませぬし、姫様の御幼年で居らせられます頃は、私のお手に
 もおかゝり遊ばした方故、一層お懐しく、お二方お恙もなく、一日も早く、
 お殿様と御對面遊ばすやうにと、實は、神佛に祈願を凝めて居りましたや
 うな事で」「成る程、お察し致します、すれば、御本人に御面會になりまし
 たら、眞偽はお分りになりますでせうね」「それは、仰せまでもございませ
 ん、姫様は、奥様に活寫して被居いましたら、一ト目お目にかゝりました
 ら」「好く分りましたでは、早速、御紹介いたします、云つて、行雄は初江
 に向ひ、「初江さん、此に被居る御隠居様は小泉大尉夫人の御母堂で、貴
 嬢が日頃から探してお出でなされる植村珠子様です、御面會なさい」初江は、
 まだ、泣吃逆ながら、それでも、信と面を捧げる。一座は、森として、次の
 間から立聞く女中の呼吸までが、耳に附く。「あなたが、乳母ですか」初江
 の濡れた顔は疑念のあるらしい色である。「はい、私が、乳母の珠でござ

います、慎んだ聲で 老婦人は両手を仕いて、恭々しく、初江を見上げる、
 「阿母さまがお亡くなり遊ばす時、乳母に遣つて、お父様のお在所をお探しま
 申せとお云ひでしたが、あなたは、父様を御存じですか」「お、お殿様は、
 お姫様の事ばかり……」老婦人は胸が迫つて、口が利ぬのである。「父様
 が、……私のこと……」初江は嬉しさのあまりに、我れを忘れて、膝
 行き出で、「乳母……」覺えず聲高に云つて、繩り附く、老婦人は、嬉し
 泣に、泣き笑ひをしながら、「おう、おう、お殿様で被仰います、まわこの
 お美しうお成り遊ばしたことは、お亡くなり遊ばした奥さまにお活寫、お懐
 しう存じます、云つて、初江と手を把り合ふ。「乳母、……、探しました
 ……、索ねました……、泣かじと齒は切めながら、白い玉は、止め度も
 なく、ホロ／＼と頬を轉ぶのである。水を打つたやうな中に、邦子とお松は
 狐狸にでも魅れた格好で、只、眼を張つてケロンとしてゐる。

(四十八)

輜重隊 兵營の横手から、谷町一丁目へ走つて居る三輛の俥が、襦と梶棒
 を卸して、研き上げた、敷石の上に下り立つたのは、初江と乳母の珠であつ
 た、他の、輜には初江の荷物が積んである。敷石は、長く、白い壁に角窓の
 西洋館に列る、兩側は、青葉若葉の植込みで、護謨木の匂ひが芬々する
 俥は、鐵柵の前に横はつてゐる。初江は、宏壯な門を見上げる、御影石の
 門柱には、墨色濃く、一條邸と記した表札が懸つて居る。「此邸が、お父様
 のお宅？」初江は呆れた顔である。「はい／＼」お珠は領いて「旋ては、お
 姫様のお邸でございます」初江は、覗くやうに乳母を見て、「私、早く、
 お父様に遭ひたいわね」御最もでございますと「お珠は眼を瞬叩いて
 「お待ち遊ばせ、今直ぐに乳母が、お殿様にお引き合せ致します」空は、ま

だ晝の明で、コバルト色に濟んでゐるのに、葉の茂つた、木陰は、もう薄い暮の色が宿つて居る。初江と乳母は、僅な荷物を車夫に擔がせて、其間の石疊を、支關へ急ぐのであつた。

* * * * *

「淋しいのう、爺」藤椅子の脇掛に脇を凭せて、老人の川澄家命を振り向いたのは、男爵一條正治である。滑かに苔の蒸した、岩と岩との間から白糸のやうに泉水へ落ちて居る水の側に切と河鹿が鳴いてゐる。川澄は赤銅色の深く禿げ込んだ額に、幾筋も皺を集めて撫で附けた白髪頭を曲め、「御心中、御推量申し上げます」陶製の腰掛に腰を据乍ら、小倉袴の上に置た片手で鼻を擧る。「爺も、珠も立派な子を持つとるから何よりの幸福ぢや、乃公美しい、云つて、男爵は、頬髭に繋がつた長い、黒い口髭を引き延ばす

川澄は兩手を、膝頭に置いて、何を仰せられます、御前とて、立派なお姫様をお持ち遊ばし今にもお便りあるべきところ、爺は却てその御前を羨しう存じます」「それがぢやて、爺」正治は、團扇を持ち代へて「聞けば、不品行といふことぢや、十九といへば、まだ子供ぢや、子供の時分から身持が治まらないでは行末が思ひやられる、殊に、爺も知つとる通り父上御逝去の後は、繼母上の御存念に逆ひ、お前方の奔走で、乃公が家督を相續したのぢやから、若しも初江が、家名を傷くるやうなことでも仕出かして呉れては東京の繼母上に對し、面目ない、そこで乃公も考へると、珠が色々骨を折つて呉れるやうぢやが、初江の身持を確めるまで對面すまいかと……」川澄は、倍と顔を上げて、「すりや、お姫様お身持のお反證が立たねば、御對面遊ばさぬのでせりますか」「さうぢや、子が可愛うても、義理には替へられん」正治の益々しい眉の間には皺が縦に集つてゐる。「御前」川澄は、中

形浴衣の裾から、昵乎と、男爵の短い髪の毛まで見上げて、「新聞は讀者を悦ばせるため、種々な虚事を捏造して、面白く書き立てます」「いや、そうばかりとも限らんぢや、煙わる處必ず火ありで、何か形が無くてはならんぢや、爺、乃公が紀念の爲めに奈加に呉れた指環を、江初は、書生に呉れたさうぢや、それが第一間違つとる」「御申言ではござりませぬが、川澄は口を切つてそれが「第一捏造と心得ます、お姫様は殊の外御孝心厚く居らせらるゝと申し、その上、乳母殿の行方をも、茂々、御詮索遊ばして居らせられたと、承り居ります、斯やうのお姫様が、いかに戀は別と申せ、母君の御片身を、見す見す他人にお下げ遊ばすことは、理に於てござりませぬ、況して御利發なお姫様の其指環が、御父君に御對面の際、大切な證據の品となるべきことを、御存じないことはござりませぬ」「白い二人乗のボートが、蒼い水から離れて、泉水の踏に横つて居る、男爵はそれを眺めて「爾うわ

つて欲しいことぢやが喃」二人は、少時無言である、夕暮の涼しい風が、さわく、と立木の青葉を揺つて池の面に大きく波紋を描き、河鹿は、水の音を掻き消すやうに啼く。こゝへ、十三四の少年が出て来て、男爵の前で立ち止ると、活潑に前を下げた。「乳母さまがお來でになりました」正治は振り向いて、「うむ、此處へ通せ」

(四十九)

「私は御遠慮致します」と、川澄は立ち上つて、少年の跡を追ふ、入り代りに彼方の、緑葉の蔭から、女の姿が現はれた、それは乳母の珠である、正治は、見て「おう、珠か、初江のことは何うぢやつた？」遠くから聲かける、お珠は、急ぎ足に近寄つて「御前、お悦び遊ばせ、お姫様をお連れ申してでございます」「何、伴れて來た、初江を？」正治は、睜つた眼に、喜びの

色を湛へて、「ふむ、そして、と、どこに居る？」云つて、藤椅子から、乗り出すやうにする。「彼方まで」と、青葉隠れに見ゆる洋館を指して「お伴をいたして参りましたがお姫様は、平民の宅にこそお育ち遊ばしたれ、お美しいと申しませうか、お氣高いと申し上げませうか、それは、お顔立ちからお言ひまで、奈加子さまにお活寫で被居います、云ふ珠の顔にも、嬉しさの歌が、幾度も寄つてゐる」「何、美しく氣高く育つるといふか、ふむ」男爵は、殊の外満足の體で「奈加子に似とるか」「瓜二つて被居います」「は、は、は、は」と、正治は高かに笑つて、争はれんものぢや喃「仰せの通り、親子ほど、怖ろしいものはございませぬ、御前が、長の年月お手をお盡し遊ばした如く、お姫様も、又一生懸命にお行方をお探し遊ばしましたさうで、私、お目にかゝりました時は、お嬉しさの餘り、乳母と仰せ遊ばして……」云ひかけて、襟袂の袖口を引き出し「嬉し泣に、お泣遊

ばしました」「泣いた？、嬉し泣に泣いたといふか、は、は、は」と、また、聲高に笑ひながら、睫毛の露を拂ふのである。お珠は、涙を呑んで、奈加子様、お逝去遊ばして以來は、四ヶ年の長の間、血縁の人もなく只、一人で、何んなにかお心細う、思召し遊ばしたかと、それを御推量申し上げますとお姫様のお心根がお哀しくて、お哀しくて、……」云つてまた潜々と泣く正治は團扇を制めて「もう云ふな、云ふな」お珠は、氣を、取り直して、「これは、御免遊ばせ、御前さまも、お姫様も、御本望を遂げ遊ばしたお芽出度い只今、老の愚痴をお耳に入れました、洵に、申譯もございせん、お姫様もお待ち兼で被居いませう、此方へお伴申すでございませう」と涙を拭いて立ち上る、正治は眞顔になつて、「待て乳母、初江は母の片身の、指環を持つてるぢやらうの？」お珠は、呆れた顔で「それはまた、何事を仰せられますか？」「いや、乃公が奈加子に遺つた指環を、初江は所持して

居るぢやらうか」云ふ正治の眼には、無量の不安が浮いてゐた。「そ、その指環は……」云ひ進む、正治は、肩間に皺を彫むで、「矢張、事實か」

「押しても、厚りませぬが、其れには何か深い仔細が」「いや、その仔細が乃公の骨を削る種ぢや」「御前さま」お珠はまた、蹲むで、緑色の立木を指し、「この植木でも、お出入の楠木屋が、鋏を入れ、枝を矯め、四季、折々の注意を怠らねばこそ斯やうに格好よく成長いたすのでござります、これを野山に捨て置いて、枝葉の茂るに任せながら、その姿の悪いのを咎めるのは、園主の罪ではあるまいかと心得ます、然し、野山に育ちましても、楠檀は何處までも梅檀で何處かに異た處のあるものでござります、詞に力を入れて「此の道理を好く御推量遊ばして、少しも早く御對面なりますやう、口を嚙んで、男爵の氣色を窺ふ。正治は、力なげに立つて、成る程、乳母の云ふ通り、鋏さへ入れたら形は好くなるぢやろ、ぢやが、梅檀は梅檀、黄檀

は黄檀ぢや、乃公は、祖先へも、繼母上へも義理がある、黄檀の惡臭、家を穢したくない、珠ッ、男爵は信となつて、「對面は、叶はぬぞ」力の籠つた、苦しい聲で云ひ放つて、倒れるやうに椅子へかゝる、其顔は、苦悶の血で赧く染つて居た。乳母は、伏き泣す、河鹿がまた、啼き切る。木の根の草村に、螢が火を點しかけた頃、三輛の車は、また、男爵家の西洋門を駈け出した。

(五十)

「田萬里仙九郎とは、お前か」玉造警察署の内勤警部は、告發狀を卓子の前に開いて蹶しく、尋問に及ぶ。田萬里は、縞セルの單衣に、羽二重の兵古帯を締めて、右手に金の指環まで箝めて居る、新しい白襟を氣にしながら、「爾うであります」云つて、警部と對向椅子に懸つて居る、警部は背

を捻つて。「お前の職業は何か」「醫學生でわかります」「何學校の生徒か
 「大阪醫學校の生徒であります」此時、横手の内勤巡查と、何やら咄合つ
 て居た白服の巡查が、靴の鳴皮を遠慮して、爪先で歩きながら近寄り、「中
 村警部殿、此奴は平時醫學生と云ひますが、嘘の皮です」「嘘ではありませ
 ん、大阪醫學校の三年であります」「よろし、三宅巡查、電話で鳥渡聞合
 せて見い」白服の巡查が、舉手の禮をして、電話室へ行きかけると、田萬里
 は慌て、「今のは間違ひであります、岡山醫學校の生徒であります」「黙れ
 警部は一喝して、嘘偽の申立てをすると許さんぞ」田萬里は小さくなつて、
 俯く、巡查はそれ見たかといふ振で退る。警部は、また常の顔になつて、
 「お前は玉造、稻荷、空堀地蔵の縁日に歩いて、婦人、殊に妙齡の女と見
 ると、艶書を袂へ入れ、淫猥な言を云ひ寄り、甚だしきに至つては其婦人に
 尾行するさうであるが、これは、警察所罰令第二條三十一項のと、云ひ

かけて改正刑法を繰り披げ「濫に他人の身邊に立塞り、又は追隨したる
 者といふ明文に相當する、依て十五日の拘留に所分する」と、明瞭言ひ渡す
 田萬里は蒼くなつて、私は、女の後を尾けた覺はありませぬ」「ないこと
 はない、現在昨夜も、本官が貴様の後を尾行て居るとも知らずに、一人の婦
 人を捕へて怪からん舉動に及んだではないか、それで、本官は現行犯として、
 告發し、本署に同行して拘留したのだ」巡查が、また口を入れる。田萬里は
 立ち上つて、「あの女は私の馴染であります、三度も四度も密會した女であ
 ります」「ウフ、」と、受け附の方で吹き出した、巡查があつた、田萬里
 は圖に乗つて「それが嘘と思れるなら、下宿屋のお女將にでも聞いて見なさ
 れ、此間も女が一人私の下宿へ訪ねて来て、金を五十圓にこの」と、左手
 の指環を、光らせて見せ、「指環まで呉れて往にました」と、今度は警部に
 向いて「馴染の女と、立咄をしても拘留にされるでありますか、日本は

其様な法律で人權を束縛するではありませんか、田萬里は目の色を變へて居る。
 「黙れッ」警部は、怖ろしく睨め附けて、「日本の法律が人權を束縛すると
 は、何たる言ひ分だ。「さうではありませんか、戀愛は自由であります、自
 由な戀愛を法律でお制止めになるのは、人間の自由を束縛されるも同じで、
 取りも直さず、人間を束縛する、のであります」八九名の署員は、どつと吹
 き出す、署長もにつと笑ふ、田萬里は眞面目である。中村警部は、笑止さを
 堪へて「諾々」とそれには取り合はずに、「其指環を見せなさい」云つて、
 手を出す、田萬里は手を突き出す。「抜いて見せなさい」「これで分るであ
 りませう」「抜いて見せと云つたら、抜いて見せるツ」吹り附けられて、田
 萬里は復た小さくなりながら悄悄と抜いて渡す。警部は手に取つて、内側
 で見たが、今度は一層優しく「これを呉れた婦人は何といふ女かね？」その
 女でわかりますか……」云ひ淀む。「さうだ、何處の者で、何といふ名前

かね？」「何の必要があつて、お尋ねでありますか」警部は聲高に「職務
 上必要があつて聞くのだ」「桃山の、村山縁子であります」田萬里の眼
 は、キョトクとして居る、警部は聞取書に書き入れて、桃山の村山といふと
 村山彌八郎の娘かね？」田萬里は微に頷く、警部は召喚状と名前を書き添へ
 小使を呼んで渡しかけると、田萬里は慌て、「縁子さんではありません、初
 江さんであります」警部は靴で床板を踏み叩いて。「何をいふかッ」

(五十一)

霧のやうな雨が、降つたり止んだりして居る、農人町の往來は雨に濡れて
 兩側の軒灯で白く光つて見える、と「小泉」と書いた丸い軒燈の文字が、
 凹地の水溜りにハッキリと映されて居る側に、黒い人影が悄乎と立つて居
 る。黒い影は、頭からすつぱりと。將校用の外套を着込んで、優しい目と、

白い脛を出したばかりであるから、男とも女とも見分が附かぬ、只、遠目にはマントが立つて居るやうである。マントは、軒の小泉といふ字を見上げて、幾度も頷きながら、狭い路次を奥へ入る、足駄の齒が、ちやり／＼と砂に喰み込んで、静な夜の空氣に響く、マントは、衝き當りの門の前で止る、門と云つても名ばかりで、只、丸太を二本立て列べたばかりである、板扉の裾も大分朽ちて大きく破れたところさへあるけれど、母屋は平屋ながら可なり、の廣さで、庭の見越の松が、折からの風に枝を揺つて、雨の玉をハラ／＼と振り落す。庭園は、池もなければ、山もない、人の背丈ほどの梅や櫻の木が植つてゐる、締め切つた雨戸の隙からは、細長い灯が洩れて、黒く茂つた葉の幾枚かを、濡色に彩色つて居る、爰へ、またマントが現はれて、軒下に影の如く佇む。戸内からは、斯うした聲が聞ける。「お姫様、お姫様、もうお寢床遊ばしては如何でございます、憎々お考へ遊ばしては、お軀にお障り

遊ばします」これは、乳母の、珠の聲である。次には、初江の哀しい聲で、「乳母……」「は、は……」「私は、口惜しいワ……」「……」

「行雄さんにまで、疑はれて……、淫奔な女と思はれて、私は、残念で溜らないで居るのに、また、お、お父様にまで……」「で、御尤でございます……」「乳母」「は、は」「私……、亡母さまの處へ、行きたいわす……」

「ひ、姫さま……」「口が利けぬのか、二人は暫く黙つて、饜々と泣く音ばかり聞ゆる。マントは、首垂れたまゝ、白い、繊弱な手で、涙を壓へて居る霧雨が、また、ハラ／＼と降り出す。「姫様」乳母は、泣聲ではあるが、借とした態で、「夢にも、そのやうなお心をお起し遊ばすものではございません、ん、假令、一時は雲に隠れてもやがて、お月様は、明くお照しになります、しばらくの御辛抱でございます、其間には、小泉も私も、いかやうに致しましたも、お父さまに御對面遊ばすやうに、屹度おさせ申します、必ず其様

な、お心は二度とお起し遊ばしますな」「姫様」いふ聲は男である、私は何處までも姫様の蔭に不品行の婦人が居りますやうに推察致しますが、其眞相をお洩し下さる事は出来すまいか」初江の聲で、私は、固く誓つたことがあるのですから、素行に就いては何にも云ひません、只、神様にお任せするばかりです」「お洩し下さいませんでは、あなたの身にかゝる雲の晴れる時はあるまいかと存じます」「詮方がないわ、私の運命と許めるわ」「お父さまに、何時までも御對面が出来ませんでも？」「その時は、私、亡母さまの處へ行くばかりです……」また、泣き伏した氣色である。ハラ／＼と雨の音ばかりで、天地は森として居る。マントは、鼻を覆り、白い優しい手を額に當て、眼を瞑つて、嚴かな姿勢で、何やら祈つて居る振に見えたが、其儘、姿は消れて了つた。近處の時計が、淋しく十二を打つた。

(五十二)

灰色の雲は、厚く空を閉ぢて、雨は小止みなく降り切る。軍服の行雄は、長劍を腰に佩きながらお松の脊中を振り向いて、「まだ見附らんか」お松は肥れた軀の、半分まで押入へ突込んで、支那鞆の中を切りと探して居たが、素手で此方を見返つて、「ございませんよ、若様」「ない？、ないぢや困る行雄も押入を覗いて「ないねね、全く」首を捻つて「不思議だ」「不思議でございますねね、先日、儘に此へ入れて置きましたのでございますのに」お松は、行雄を見上げる。「若様のマントでせう、松ちゃん」お梅が唐突顔を出して、「お嬢さまのお部屋にございました」云つて、其處へ丸めて出す。「道理でいくら、探しても無い筈ですよ」お松は、笑ふやうに横目で行雄を見る、行雄は黙つて、マントに手をかけると、お梅は一通の封書を出して、